



日常

川上鉄二、47歳。

男は東京の街の片隅を小さな買い物袋を提げたまま歩いていた。

一聞こえてくる鈴の声。

鉄二は世間の音に耳を貸した。

…クリスマスシーズンの街を歩き交う人々は

自分の傍らにいる家族や友人、恋人と笑顔で会話をしながら幸せそうな顔をして歩いていた。

しかし鉄二は見た感じから、クリスマスモードでないことが見て取れた。

左手には何にも入っていないような薄いレジ袋。

それが全てを語っているとも言えた。

「一キャツ、キャツ」

父親の周りをチョロチョロする小さな子供。

鉄二は自然と目がいった。

…確か二人の娘もクリスマスは友達の家で過ごすとか言ってたっけな。

自分の子供とよその子供の様子を重ね合わせた。

まだ中学生2年生と小学5年生の娘だが友達の家でクリスマスパーティーをす
っていた。

『子供なんだから人様の家に泊まるなんてやめなさい』と、

普通の親なら言うだろう。

でも口出しをすれば完全に親子間は冷え切るだろうし、その後言うことを少しも聞か
なくなる可能性もある。

第一自分は娘達に何も親らしいことをしてやれてない負い目から

自由にさせてやる、のが鉄二の教育方針であった。

「…ふう。」

鉄二は冷たい麦茶をコップに注ぐと一気に飲み干した。
麦茶の入ったボトルを冷蔵庫に戻すと椅子に軽く腰かける。

「—え？」

何も揺れてはいないのに体が震えた。
…痙攣したんだな、と直ぐに分った。

しかし、あの夢は実にリアルだった。

地割れする地面、どこかに掴まってでもいないと立てないほどの振動、人の悲鳴、次々と倒壊する建物…。

あれほど強い地震は経験したことがないが
多分あれくらい恐ろしいものなのだろうという予測だけはついた。

二人の娘のことをひたすら考えながら家路へと向っている時だった。

「！！」

「うわあっ！！！」

—いきなり大きな揺れが鉄二を襲う。

そして次の瞬間体勢を崩し、後ろに大きく尻もちをついた。

「きゃあああああ！！！」

「うわあああ！」

—通行人達も次々とけたたましい叫び声をあげた。

バランスを崩した人々は鉄二同様勢いよく地面に尻もちをついた。

何とかその辺の柱や出っ張りに捕まり体勢を保っている人々もいるがそれでも強い揺れには勝てず、体勢を崩していった。

地面も空も建物の揺れも収まるどころか、増すばかり。

電線に止まっていた鳥たちも翼を広げ、空の彼方へ飛んで行った。

「…………ツツ!!」

鉄二は目をつむったまま揺れが収まるのをじっと耐えた。
電柱や建物の側にいると危ないと察した鉄二は
四つん這いで危険な場所から少しでも安全な場所に移動した。

「…あっ！あっ、あれ見てっ！！！！」

移動した近くにいた若い女性が大きな声を出した。
大きな建物を指差した先に鉄二もその視線の先に目をやると、
大きな地響きと共に大きなマンションが上からの
圧力に耐え切ることができず一瞬にして下の土台を押しつぶした。

「きゃああああああああああああ！！！」

その事態を生で見てしまった通行人たちは、
おぞましいことを想像したであろう。
通行人は、喉の皮膚を突き破るほどの大きな叫び声で
倒壊したマンションに向かって叫んだ。

「……ああっつああ…っ」

鉄二は驚きのあまりすぐに声をあげることができなかった。

「あ…ツああ…あああつ…」

けどその声も徐々に大きくなっていき—

「うわあああああああああああ！！！！」

最後は、けたたましい猛獣のような叫び声をあげた。

「うわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああ！！！！」

「—…っ！」

「—はあ、はあ、はあ、はあ…ツツ」

—鉄二はけたたましい自分の断末で目を覚ました。

額からは滝のように汗が流れおち、その汗は胸元を伝った。

息遣いもかなり荒く、激しい動悸が鉄二を襲う。

「…はあ、はあ…ゆ、夢か……。」

ヨロヨロと体を起こすと、さっきのことは夢であったことに心を休めた。

鉄二は再び眠りについたら、あの夢の続きを見てしまいそうで怖かったが明日も仕事があるからと明日に備えて早く寝ることにした。

一翌日

「一…。」

川上家の朝の食事風景。

一家の大黒柱の鉄二、現在大学1年生の長女の真珠と高校1年生の次女・翡翠の三人で食卓を囲んでいた。

食パンと目玉焼き、ウインナーと牛乳という質素な洋食の朝ご飯を無言で黙々と食べ続けた。もちろん誰も喋ろうとはしない。

朝は皆のテンションが異様に低かった。

「…いってきます。」

長女の真珠のとった行動が静謐なりビングの静寂を全て破った。

「…いってらっしゃい」

次女の翡翠と父の鉄二は気の抜けた寝起き顔で真珠を見送る。

10分もたたない間に翡翠も真珠に続き朝食を食べ終えた。

翡翠はリビングを出る前に真珠が置いて行った皿を台所に移してから
スクール鞆を方にかけて、リビングを出た。

「いってきます」

「いってらっしゃい。」

翡翠が出て行った音が聞こえる。

鉄二はその時、完全に『孤独』になった。

「…さて…俺も仕事、行くか…」

鉄二はプレートを台所の流しに運び、水と洗剤で簡単に洗うと
翡翠に続き、家を後にした。

仕事

鉄二は腕時計を見つめていた。

黒いソファに腰掛け、大切な来客を待ちかまえていた。

その待ち時間の間にテーブルも念入りに拭いたり、お茶の用意も万全だった。客を相手にするのは慣れているはずなのだが何故か今日はいつになく緊張していた。ソファの上で忙しない貧乏ゆすりを何度も繰り返し、机の上に埃がついていないか確認しながら今か今かと来客の訪問を待ちわびていた時だった。

「一あ…」

ドアをノックする音が聞こえる。
来客が訪れた。鉄二は、サインを出す。

「ど、どうぞ」

「失礼します。」

「ああ～、お久しぶりです」

「お元気そうで何よりです」

部屋に入ってきた男は鉄二の手をしっかりと握り締めると、勢いよく上下に二、三回降った。

「—いやあ、おかげ様で今儲かってますよ」

「そりゃよかったです。」

鉄二は満面の笑みで来客の男の湯呑に茶を注いだ。

緑茶の上品な香りが湯気と共に宙へ舞い上がり、

二人の顔を包む。

「あ…緑茶、好きですか？」

「ああ…、大好きです」

鉄二はお茶は何が好みか聞いてから注ぐつもりだったのに、

事もあろうにそれを聞く前に緑茶をそそいでしまった自分を

少し情けなく感じた。

「…どうぞ」

「いただきます」

—来客の男は音を立てずに上手く茶を飲んだ。

今まで見てきた来客の中ではひよっとしたら一番礼儀作法と

いう物に長けているかもしれない。

などのどうでもいいことを考えながら、どこからともなく

湧き出てくる不安や緊張を必死で解す。

十分に心を解き解した後、鉄二は本題に入ることにした。

「…いや、失業してねえ一時はどうなるかと思いましたが、

こうやってまた不動産を個人で立ち上げることができて…。

本当にありがとうございます、小倉さんには何から何まで…

やってもらって。感謝の気持ちでいっぱいですよ、ホント」

「いや、僕は本当資金を貸した程度で…」

「資金を貸してもらっただけでなく、生活の方も本当に安定して長女を私立大に通わすだけの余裕だってありますしね…」

「ああ、娘さんがいらっしゃるんですか。」

「ああ、はい。大学1年のと高校1年のが二人」

「へえ、川上さんお若いですからそんな大きなお子さんがいるようには見えませんでした」

「ありがとうございます。…え～世間話はこれくらいにして約束の500万お返ししますね」

鉄二はやっと本題に入り、小倉に分厚い茶封筒を手渡した。

「はい」

小倉は中身を確認すると鞆の中に茶封筒を丁寧につまえる。

「返すとなんですね、いや～、何かスツキリしま…うわあっ！」

「…じ、地震!？」

鉄二が、借金を全部返金した後の解放感に満ち溢れていた時、急に部屋全体、建物全体が激しく揺れ始めた。

小倉は無駄のない敏捷な身のこなしであったが、鉄二は何が起こったのか理解できず取り残されていた。

「机の下に隠れてっ！！」

「…ッ！」

慌てふためく鉄二に冷静に指示を出すと、透明のガラス貼りの机の下に避難させた。

湯呑が倒れ、中の緑茶がこぼれる。

家具がどんな風になっているかをここから確認することはできないが、物が割れる音が聞こえることから、タダではすんでいないことが想像できた。

何もできず、揺れが収まるのをじっと耐えしのぐこと5分。

ようやく机の下から体を覗かすことができた。

「……………」

「揺れ…治まりましたね」

ようやく隠れていた机の下から体を抜け出すと、物がごった返す乱雑とした部屋を目の当たりにした。

「あれ…？」

「…」

揺れはもうおさまったのにも関わらず、鉄二は呼びかけにも一切対応せず中々出てこようとしない。

「川上…さん？」

「…わっ！」

小倉が鉄二の体に触れようものなら、体がひどく痙攣しており、大量の冷や汗をかいていた。言葉を喋ろうにも呂律が回らず会話が成立しない。地震による揺れは治まったものの、鉄二の体の震えは酷さを増していた。

「一…大丈夫ですか？」

「…ゲホッ」

鉄二はミネラルウォーターと錠剤を一緒に飲んだ。
口に大量の水を流し込んだため、口に含み切れなかった水が
服を濡らす。客人に背中をさすって介抱してもらうのは、
冷汗三斗の思いだった。

「はあっ…あ、すいません。ありがとうございます」

「いえ……………」

鉄二はやっと正気を取り戻し、介抱してくれた小倉に対して
感謝の気持ちを述懐するだけの落ち着きを取り戻した。
小倉は鉄二の手元をジッと見つめ、
転がる薬の事について問いかけた。

「精神安定剤ですか？」

「あっ！」

鉄二は慌てて精神安定剤と書かれた薬瓶のラベルを隠す。

「…ですよね？」

「…いえ…つまあ…そのっ…」

息を切らしながら喋るせいか、うまく説明できない。
説明するのがまず躊躇された。

『~~~~~……ツツ』

小倉はテレビの電源をつけた。

『一続いてのニュースです』

画面上側には、地震の震度と揺れた地域の名前が表示されており
自分達の住む〇〇市は震度5弱と表記されていた。

『この地震による津波の被害はありません』だったため、
胸をなでおろした。

「…さっきの地震凄かったですよね。津波の被害がないにしても」

「え、ええ…」

「東日本大震災の直後は震度5とかの余震はこの辺りでも
普通に起こるようになったから、あんまり動揺しなくなりました
けどね」

「…友人を亡くした時はあんなに辛かったのに今はもう地震が
少くらい起こっても動揺すらなくなりましたよ。
死に慣れるって本当に怖いんですよね」

「ああ…」

「…天災はいつ起こるか分からないから、防ぎようはありませんけど
人災っていうのは本当に許せないものですよ」

小倉の正論に曖昧な返答しかできない鉄二の様子は
完全に硬直していた。

小倉がテーブルに転がっている薬を爪で突い

「そうか…。

…あなた…だからこんな薬、飲んでるんだ。」

「え…？」

「分かりますよ、あなたのこと」

小倉はテーブルに転がっている薬を摘まんだり

転がしたりして弄ぶ。

そして、小倉の問いかけが鉄二の心は揺さぶれた。

鼓動が高鳴る。さっきのとは比べ物にならないくらいの心拍数。

このまま心不全で死んでしまうのではないかという不安を抱いた。

「やっぱり隠せないものですね、罪っていうのは」

『—いい儲け話があるんだけどさ』

—そんな儲け話に乗ったのが全ての間違いだった。

「ねえ、川上鉄二さん？」

「…っ」

小倉の言葉に言葉を失い、鉄二は狼狽した。

儲け話

—…今から8年前。

真珠が小学5年生、翡翠が小学2年生の頃。

俺はとんでもないことに手を貸してしてしまった。

俺はマンション販売業者に勤めて頃。

勤め先の社長を含んだ元一級建築士、建築会社の社長ら数人が構造計算書を偽装し、国土交通省に提出したことが外部に漏洩したことにより、警察に起訴された。

『—そ、そんなことダメですよ…』

『…君は、私に逆らうのかな?』

『…………っ』

俺は社長の権力に屈服し、

いずれはバレる嘘であったのに、俺は目の前に積まれた大金に目が眩みこの会社にしがみ付くことの方を優先した。

『……………っ』

不正な取引が目の前で行われていたが、それを黙許せざる得なかった。

だが、社長達の陰謀が一本の電話が全てを崩壊させた。

『一前橋建設設計事務所の前橋氏が〇〇の
玉田社長と〇〇・向井建設と手を組んで耐震強度を落としたマンションを消費者に
売りつけた』

という内容の告発の電話。

内部告発で偽装に関わってた人物は皆捕まり、勤め先の社長も、耐震強度偽装を知
っていながらマンションを引き渡した詐欺容疑で起訴、逮捕。東京地裁で懲役3年
、執行猶予5年が確定。

しかし判決が決定するまでの間、社長は法廷で自分の罪を決して認めることはなか
った。

俺は社長が逮捕される数日前、こんなことを告げられた。

『一絶対、知っていたことしゃべるな。お前は
知らないふりを装え』
と指示を受けた。

社長は最後の悪あがきとして俺に会社を託したが、
会社は東京地裁に破産手続き終結を宣言され、社長の望みも虚しく破綻した。

俺は、社長が捕まったことで全ては終息したのだとホッと胸をなでおろし、今まで
通りの生活を営んでいたのだが、
一つのニュースが、俺を罪から一生逃れなくした。

本当の悪夢はここからだった。

【偽装問題の弊害 震度5弱でマンション倒壊
犠牲者500人を出す】

...俺はその記事を見たとき愕然した。

恐れていたことが現実のものへとってしまったのだ。

自分は殺人を起こしたのにも関わらず、自首もせず親子三人で普通の顔をして暮している。

俺はその日から頻繁に地震の夢をみるようになり、うなされるようになった。

記憶に新しい夢は、自分の目の前でマンションが倒壊するという
陰惨極まりない夢だった。

「—あんたあの偽装問題のこと知ってたんだろ？」

「違うッ…違うッ」

「凶星さされたって顔、してるよ？」

「…っ！」

眼鏡越しから伺えるこの男の目は、先程までの気品に満ちた目とは違い氷河のような冷たい目へと変貌していた。

その目は、全てを見透かしこの空間に存在する全ての本質を見抜いているようだった。

小倉はゆっくりと席を立つと、ひっくり返った置物の一つを定位置に戻した。

「…っ」

「本当どう思うかなあ、娘さん二人。自分の父親は500人の命を犠牲にして金儲けしてたって知ったら。」

「…そっ、それだけはやめてくれっ！！！」

「おまけに自分は罪を償わず個人企業を立ち上げ、裕福な暮らしを営んでる…」

「…たっ頼むっ！！言わないでくれっ！！」

「…じゃあ、俺の言うことをこれから聞くんだな。どんなことでも？」

「……っ！」

「…返事がないぞ？いいのか？」

「…ハイッッ！」

「………よし」

言葉だけで面白い程追い詰められていく鉄二のことを小倉は完全に嘲弄していた。

一弱みを握られた鉄二の生活は今、この男の悪辣な手段で攪乱されていくことになるのである。

屍

「一ねえ、お父さん」

「…はっ!？」

「…何ボーツとしてんの??」

「…あ、すまん。」

「今日さ、地震ヤバくなかった？」

「ああ、お前の大学の方も揺ったのか」

「そりゃあ。この県全域だったじゃない。

講義中でびっくりしたよ」

「ケガはなかったか」

「うん。ああ、でも講義中止になっちゃったよ」

「…翡翠の高校もか？」

「うん、でもケガはなかったよ」

「そうか…。よかった…」

「お父さん」

「ん？」

「汗で服ビショビショだけど大丈夫？」

「あっ…」

真珠に示された襟首は汗で濡れ、服の色が少し変わっているほどだった。

鉄二は晩御飯を食事している時も小倉の事が頭から離れず安心していただけか、こんなに汗をかいていることにすら気づかなかった。

「今日のお父さん変なの～」

腹をゆすって哄笑するが真珠の無邪気な姿が鉄二をより困厄させた。

一人で煩悶する悩みも誰にも打ち明けられるはずもなく、

…神様…どうか、娘達だけにはバレませんように…。

と、強く神に願うことしかできなかった。

しかし、

これから起こる悲劇は鉄二一人の力ではどうしようもなかった。

「一疲れた～。今日の講義～」

「分かる～、あの先生の話長いもんね」

「ふあああ…。んんっ」

翌日、講義を終えた真珠と友人はのん気に筋を伸ばしたり、のんきに首を右へ左を振ったりしていた。

さっき講義の終わった解放感から、体のあらとあらゆるところに疲労が流れ込んできたのだろう。

「さてさて、嫌なお勉強タイムが終わった後はやっぱお茶だね」

「行こっか～♪」

真珠と友人は講義室を出るとすぐさま行きつけの喫茶店へ向った。

「—お待たせしました、アイスティーでございます」

「ごゆっくりどうぞ」

運ばれてきたアイスティーのストローを時計回りにかき混ぜながら、大きな笠増しの氷を溶かしていく。

窓際から見える街では、カップルが仲睦まじそうに手を繋ぎ街を歩いていた。そんな姿を静かに見送る真珠の友人がこんな話を持ち出した。

「—そうそう、真珠。あんた今フリー？」

「え？」

アイスティーを啜っていた真珠は、慌てて口からストローを離す。

「良い人知ってんのよ～、私。男友達の知り合いでさ、彼女募集中なんだって」

「ど、どんな人？」

「それがさ、彼女いないのが不思議なくらい。イケメンなの。写真あるのよ、ほら」

画像フォルダを開いたスマホを、そのままの状態で見せて真珠に寄越す。その画像に写っていた青年は、大きな城をバックにピースサインをして佇み、黒のジャケットとジーパンを着用していた。一目見ただけではそんなに目をひくような容貌ではなく、初めは何も感じなかったのだが

「…」 「イケメンじゃない？私のはじめ見た時、真珠が好きそうだから良いかなって思ったんだけど」

「どう？」

友人の後押しや、画像を長い時間見つめていたせいなのか
真珠は特に理由はないがこの青年から何か魅力を感じた。

「ねえこの人、年いくつくらいなの？」

「あ～確かね、今年25位になるとか言ってたと思うけど。
年の差もちょうどいいしさ、真珠の好みでしょ？会ってみたくない？」

「へえ・・・。」

一年の差があまり開いていなかったということもあって、真珠の中の
条件をこの青年はクリアしていった。

薦めた友人は真珠が溶かされていく姿に少し期待し、
心なしか嬉しそうだった。

「この人のメルアドとか知ってるの？」

「私が今日この人にメールして真珠のことは予め話しておくから。
メールが今日中に来なかったら私にメールして？」

「うん、分かった」

一午後8時29分

「…っ」

真珠は新着メールを何度も問い合わせていた。
しかしいつも返ってくる答えは
《新着メールはありません》この一言だけ。

友人にメールを送りたかったが、
今日中に来なかったらという条件付きなので
送ることができない。

悶々とした気持ちが蓄積して、
それが許容範囲を超えそうなところまで達した時だった。

「！！」

ヴァイブレーションが響く。

真珠は高速で指を走らせ受信ボックスを開けた。

【夜分遅くにメールすいません。裕子さんを通じて真珠さんのお話は聞いています。あなたも僕の話が裕子さんがお話してくれたはずなので聞いていると思いますが、メールではなんなのでまた今度会いましょう。ご都合が空くようでしたら返信をお願いします】

「ついに来たかッ…！」真珠のテンションは一気に張った。
ずっとずっと待っていた人からのメール。
換言すれば、まさに『待ち人来たり。』だった。
すぐさま真珠の指は休むことなく走り続け、キーボードを打ち鳴らした。

【私はいつでも大丈夫ですよ♪ー】

「あ。」

会う約束をする前に真珠はとても大事なことを忘れていた。

「名前聞くの忘れてたわ、いけない。いけない」

「ひ～すいっ」

「ん？何？お姉ちゃん」

「…何か手伝おっか？」

「どうしたの？急に」

一階では妹の翡翠がみんなが食べた皿を念入りに洗っていた。

真珠はメールを打ち終えた後、どこか色気づいた顔をして手伝いを申し出た。

「…勉強しなくていいの？」

「今、終わったからさっ♪」

さっきまで携帯をいじっていたのにも関わらず、

真珠は平然と嘘ばかりか乾燥機に皿も並べた。

「—……………♪」

大して面白くもない作業を鼻歌交じりで体を揺らしながら

皿洗いを手伝う姉を翡翠は静かに観察していた。

「…お姉ちゃん、何だか今日ご機嫌だねえ」

「そうっ？」

「うん。…何かいいことでもあったの？」

「うふふ♪ヒ・ミ・ツ」

真珠はただ笑うだけで何故機嫌がいいのかという理由を明確にせず、曖昧な言葉でただ誤魔化すだけ。

「……。」

鉄二もテンションの高い真珠をコーヒーを啜りながら、不思議そうな顔で真珠の行動を眺めていた。

珍しいな…。

家事に一切の興味を示してこなかった真珠。

台所たつなんて、どういう風の吹き回しだ??

十分に観察していなくても真珠の色気づいた行動は明らかにおかしかった。

ひたすら同じことの繰り返しである皿洗いを笑顔で終わると、次は二階のクロゼットから服を数枚取り出して辺りに広げファッションショーを始める。

「—ねえ、似合う？」

「え？」

「どうしたの？急に？」

「うふふ、明日ねちょっとお出かけするんだ」

「…ふうん、どこに行くの？」

「ん—…まだ分かんない。…あ、ねえねえ！お父さん」

「ん？」

「どう～？似合う？」

真珠は同性である妹・翡翠に同意を求めることがあったとしても、異性である鉄二に意見を求めるのは滅多になかった。

記憶にないだけでひよっとしたらこれは初めての事かもしれない。

真珠の行動を妙だと思いつつも、

貴重なことでもあると思って、鉄二は真珠の質問に真面目に対応した。

「うん。似合ってるんじゃないか？」

「ねえ、明日これでいいかな～？」

「んー…、いいんじゃない？それで」

「ふふっ、じゃあ明日これにしよっと」

「♪」

真珠は用のなくなった服をどっさりと抱え、
二階にある自分の部屋のクロゼットに収納しに戻った。

デート

「—…………♪」

真珠は新宿の街の真ん中でおしゃれをして青年を待っていた。

「まだかなあ」

普段よりも化粧に力が入り服装も極めて派手だった。

初デートということもあり、気合いが入って集合時間よりも早く来てしまった。

「…………」

昨日はデートの待ち合わせ場所とか目印になるものについて色々メールで話した。

車の色は黒だと言っていただけなので同じ色の車についつい目がいってしまう。

特徴があまりない車だと彼が言っていたから、見つけるのは難しいのではないかと、不安になっていた時だった。

「—ねえねえ、君今一人？」

「え…。」

「俺達と遊ばない？」

彼を待っていた時、柄の悪そうな男集団数人に絡まれた。

「あの…人を待ってるので…」

「そんなのいいじゃん、俺らと遊ぼうよ」

「あの…本当、ごめんなさい」

「えー、いいじゃん。そんなこと言わずにさあ」

「人を待ってるので…」

立派な体型の男達は二の腕をタンクトップから覗かせ、
外見から他者を威嚇しているようだった。

男達は断っても聞かず、それどころか断れば男達はますます
まとわりついてくる。

「なあ俺達と遊ぼーよ」

「いやっ…!」

一腕をしっかりとつかみ、男達は自分達のテリトリーに真珠を入れよう
とする。振り払おうにも男たちの力には敵わなかった。

体はどんどん男の集団に吸い込まれてゆき、絶対絶命のピンチに
なった時だった。

「…おい、お前ら何してんだ」

「!？」

「なんだ？お前」

「…俺の連れだ。離せ。」

「あ？」

「腕を離せてって言ってるんだ」

「なんだお前」

「……………」

後を振り向くとそこにはあの写真に写っていた青年だった。

タイミングよく来てくれたおかげで、注意が彼の方へ向き

真珠の腕から一旦離れた。

スキンヘッドの男が彼の胸ぐらに手をかける。

「…っ」

「兄ちゃんいい度胸してんじゃねえか」

だが、彼の方にチンピラが集まってしまった。

こんな体格のいい男たち数人を無傷で倒せるとは思えない。

スキンヘッドの男が彼を目がけて拳を振り上げた瞬間、

真珠は目を瞑った。

「ううっっ！！」

「……………！？」

—しかし、真珠は驚くべきものを目にした。

彼は、次々といい体格の男を片っ端からちぎっては投げ、
あっと言う間に体格のいい男集団を一人で倒してしまった。

「す、すみませんでしたっ…。」

必死で青年に謝る最後の一人を地面に投げつけると、
胸倉をつかみこう言い放った。

「謝るならこの子に謝れ」

「…………っ」

「すいませんでした…っ」

と、最後真珠に向かって謝ると男は気を失った。

「…………ツ」

「…怪我はない？」

「は、はい…」

一彼はほぼ無傷で男たちから真珠を守ってくれた。
その姿に真珠は彼への強さや格好よさに好感度はさらに上昇した。
普段メガネをかけて真面目そうな雰囲気
を漂わしているのにも関わらず喧嘩はかなり強かったという
ギャップにもかなりやられた。

「さあ、いこっか」

「はい」

真珠は先程までの出来事はなかったかのように彼の車に乗り込み、
デートの目的地へ向う。

「一これ可愛い！」

「買ったげよっか？」

「ホント！？」

彼に真珠は洋服を買ってもらったり、
ご飯に連れて行ってもらったりと至れり尽くせりだった。
本当は午後4時くらいに切り上げるつもりだったデートも
二時間延長され、家に帰宅するのは午後6時になってしまった。

「—今日は楽しかったね」

「本当にありがとう。こんなにたくさん買ってもらって」

「いやいや」

—ゴーツ……。

道路に車のタイヤの擦れる音が聞こえる頃。

すっかり辺りは茜色に染まった空に包まれ、人々の家路を明るく照らしていた。

色々ありすぎて疲れてしまったのか、車内は水を打ったように静まり返っていた。しかしその途中、真珠はあることに気付いた。

「あ…」

「ん？」

「腕…。」

「え？」

「ちょっとケガしてる…」

「あ、ホントだ」

「大したことないから大丈夫だよ」

「ダメだよ、私がケガさせたようなものだから。

家で手当てする」

「本当？じゃあ、頼むよ」

「……………」

無敵とも思えた彼の腕に少しの切り傷があった。

これは全部自分が原因といえば原因だ。

防ぎようのなかったことと言えども、自分を守ってくれてこんなことになってしまったのだから手当をするのは当然であろう。

—しかし、真珠は心の中でほくそ笑んでいた。

ただの慈善ではない。

家に呼べば、彼といる時間が少し長くなる—。

という魂胆も含まれていたから、こんな善意に満ちたことをしようとしているのだ。

「一ただいま」

「あ、おかえり。…どうかしたの？」

「ちょっと、ケガしちゃってここで手当てしようと思うの」

「…」

彼は翡翠に申し訳さなそうにお辞儀した。

負傷した部分は、浅いかすり傷だったがとても痛そうだった。

翡翠は気の毒そうな目で、傷の部分を見つめた。

「一救急箱とってくるから。待ってて」

「あ、ゴメンね」

真珠は二階に救急箱を取りに行った。

鉄二は不在で一階の居間では翡翠と青年は部屋で二人きりになってしまった。

「あ…」

よく机を見れば人を通せるような状態ではなかった。

自分の愛読書の雑誌や飲みかけの紅茶、携帯。

翡翠は慌てて雑誌と携帯をソファに置いた。

「お茶でもいれますね」

「あ、すいません」

来た客に何も出さずに自分だけ紅茶を飲むというのは無礼行為だし、それに何かしていないと間が持たない。真珠がいて、やっこの場は成り立つようなものだから、と思うと普段以上に忙しく動いた。

「一はい、どうぞ」

「頂きます」

青年は紅茶を啜った。

翡翠も残り少ない飲みかけの紅茶を飲み干すと台所にカップを戻し、戸棚からクッキーの缶を取り出した。

クッキーをお皿に移し、机の中央にポンと置いた。

「お口に合うか分かりませんが…どうですか？」

「あ、どうも」

「あの…紅茶のおかわりは」

「おかまいなく」

「あ…そうですか」

翡翠はチラッと時計を見た。

まだご飯を作るには時間が早い。

本当はテレビを見たいところだがお客がいるし、そんな勝手なことはできない。

「あっ…すいません。何か拭くものありますか？」

「あ…ティッシュならありますよ」

何か拭くものを探す青年に翡翠はティッシュペーパーを差し出すと、曇ったメガネを外し、念入りに拭き始めた。

「ありがとうございます」

「…翡翠さん、でしたっけ？」

「…は、はい」

「…お父さんとお姉さんとの暮らしは楽しいですか？」

「え…まあ…。」

何故この人はおかしいことを唐突に聞くのだろう、
と思ったが答えないのはあまりに失礼なので一応返事した。

「……………そうか。」

青年はメガネを慈しむように念入りに拭き続ける。
その答えに少し笑みを浮かべ向い合わせのソファに座る
翡翠を見つめた。

「…もし…」

「……………」

「…それが一瞬にして崩れ去ったら…どうしますか？」

「……………ツツツ！！！」

「……………」

……………翡翠には戦慄を感じたことにちゃんとした
理由があるわけではない。
自分を覗きこむように見つめた青年の目がとても恐ろしく感じたのだ。

青年はメガネを外したまま紅茶を啜り続け、不気味に口角を上げた。翡翠はどこに視線を合わせればいいのか分からなかった。しばらく目をあちこちに泳がせながら、奇妙に流れていく時間を必死で堪えぬこうとしていた。青年は紅茶を飲み終わると、再び翡翠の顔を見つめた。

「……………」

「なーんてね」

「……………」

「おかしなこと言ってごめんね」

「……………」

「俺、たまにこういう意味分ないこと言っちゃうタイプだから。気にしないで」

「は、はあ…。」

「俺なりのユーモアだと思って」

と言って、念入りに拭いたメガネをかけた。

すると急に顔の人相が元に戻った。

翡翠はこの時、感じた。

今自分が見ているものは、多分虚像なんだ。

眼鏡を外した姿が実像なんだ、と。

全て感覚的な意見だ。しかし、何故か絶対的な確信が持てる。

背筋が凍りつくような思いをしながら今か今かと姉を待っていた。

「……………っ」

「ごっめーん！中々見つからなくて。」

「…」

—すると思いが通じたのか、真珠は騒がしい音を響かせながら一階へ降下してきた。真珠の気配が近づけば近づくほど、この奇妙な空気で汚染された空間は浄化されてゆき、胸の詰まるような

苦しさから解放されていった。真珠はロスした時間を補うかの如く救急箱から包帯を取り出し手当をした。

「もう、6時半だしご飯の時間だろ？そろそろ帰るよ。
長居しちゃってごめんね」
「いやいや、全然いいよっ！」

帰宅する頃の青年の顔は、普段の人相に戻っていたが、翡翠は何故か今の顔は仮の姿のように思えて仕方ない。姉の恋人をこんな風にしか思えなくて、翡翠は心を痛めた。

「一ねえ、似合う〜？」

「え？」

真珠は二人より早々と夕食を済ませ、まだ夕食を食べる鉄二と翡翠に今日購入した洋服の感想を求めた。

それを見た鉄二は目を丸くした。

「…見ない服だな。どうしたんだ、それ。」

「買ってもらったの〜♪」

「…誰にだ？」

「小倉さん♪」

「…………えっ？」

「ど〜う？」

「…あ、ああ…素敵だと思う」

「…………。」

から揚げを食べていた鉄二の顔が一瞬ひきつった。

翡翠はおかしくなった表情を見逃すことはなかった。

「一ねえ、翡翠。」

「…っ！」

真珠の声に翡翠はハツとした。

「翡翠はどう思う？この服」

「ああ…、何かお姉ちゃんらしい服だね」

「お姉ちゃんがこの日を境に家事を一手に引き受けてくれるようになりました。」

普段ならお姉ちゃんと私がする家事の比率で言えば私の方が多かったのですが、

一気に私の仕事は勉強だけになりました。

何故、最近家事を意欲的にやってるの？と聞いたらこう答えました。

「私ももうそろそろ自立したいから。」

だそうです。

お姉ちゃんは小倉さんがかなり影響しているようで、
人の考えを良い方向に変えるほど影響力がある人なら、
そこまで悪い人じゃないのかなと思うようになりました。

…私の見間違いだったのかな…。

—小倉さんは気がつくとも朝お姉ちゃんの送り迎えをするよう
になっていました。

* 追い詰められる男 *

「—おはよう、真珠」

「勇作、おはよう〜!」

「……………」

私が高校に行く時間と同じ時間に必ず小倉さんは家の前まで来てお姉ちゃんを車に乗せて大学にまで車を走らせていきました。お姉ちゃんと私は学校に出るのがほぼ同じなので小倉さんと居合わず機会はたくさんありました。

「ねえ。」

「はい」

「…翡翠ちゃんも送って行ってあげようか？」

「…え、結構です…」

「そう」

小倉さんは気をまわして送り迎えしようとしてくれたのですが、あの車に乗り込んだらいけないような気がしてしまって…どうしても乗る気にはなれませんでした。

「—じゃ、ありがとう」

「ああ、また迎えに来るよ」

—小倉は毎朝真珠を大学の門の前で降ろすと、同じ学部の女友達数名が目に入った。こちらの存在に気づいたのか女友達たちはこちらに向かって歩いてきた。

真珠はこれはチャンスだと思って、

「あ～そうそう。」

「ん？」

車のドアの方に向けていた体を再び反回転させ、

勇作の方に向けた。

「いっつもありがとう。」と言って勇作の口の端にキスをした。

横目で女友達の方を見ると彼女たちの視線は勇作と真珠の方に

釘付けだった。

その群衆の反応を心の中で少し笑うと、

「……………行ってくるね♪」

と言いきり、軽快な足取りでキャンパス内へ入って行った。

その幸せそうな後ろ姿を見つめる勇作は、

「……………フツ……………」

何故か意味ありげな笑みをこぼしていたのだった…。

「—これで講義を終了します」

一斉に鞆にノートや文具を詰め、講堂を後にする生徒たち。

「一ねえねえ、真珠。」

「……ん？」

話しかけてきたのは、今朝真珠と勇作のキスシーンを
目撃した女友達たちだった。

「真珠と今朝一緒に居た人って彼氏！？」

やはり、あの話題にふれてきた。

なんと良い反応をする子たちだろうと、真珠は内心面白かった。

「そうだよッ〜♪」と即答する。

「わ〜、いいなあ〜、車からだったけどさ
凄いイケメンじゃなかった？あの人年上だよね？」

「うん、5歳以上年上かな。」

「何か大人と付き合うとか緊張しない？」

「……………」

真珠は騒ぎ立てる皆の反応で更に優越感にひたる。

イケメンで何でもできる年上の彼氏がいる自分はとても自慢だった。

いつもこのメンバーと一緒にキャンパスを出ていたのだが、
今日ほど一緒に出るのが楽しいことはなかった。

「あっ！」

「もう来てるの？」

「うん♪」

勇作はありがたいことに一番来てほしいタイミングで来てくれていた。

「……………」

真珠はジッと勇作を見つめると向こうも気が付いて車から出てきた。

「真珠」

「…勇作！」

車のドアを閉めると軽い足取りで真珠達の居る方へやってきた。

「一帰ろっか」

「うん」

「……………♥♥」

女友達はとろけるような目をして勇作を見つめているのに
勇作は気付いた。

「あ、真珠の友達？」

「ええ」

「…あ、あたしたち…」

「いつも真珠がお世話になってます」

「いや…こちらこそ」

「…あ、じゃあね」

「あ、バイバイ」

勇作は真珠の腰に手を回して車へと帰っていった。

その後ろ姿を見た友達たちは、

「うわ〜…、凄いイケメンじゃん…いいなあ、真珠は…」

ただただ羨ましいばかりだった。

「…………♪」

真珠は最近ご機嫌だった。

彼氏のことによって優越感に浸れるしいつもお姫様扱いしてくれる

勇作がいてくれて。

—真珠はご機嫌だったが、鉄二は気が気ではなかった。

「…………ツ」

気が立っている時に無言で忙しく指を打ちつけるのが癖だ。

誰もいない火曜日の午後6時20分頃の居間。
電気もつけずに指をただひたすら打ちつけ続けていた。
ずっと一人で、あの事について煩悶していると

「…お父さん、どうしたの？」

「ハッ！」

学校が終わった翡翠が自宅に帰ってきた。

「…いや、何でもない

「…お父さんこの頃様子変よ？」

「…そうかな…。」

はぐらしたものの、
悄然たる後ろ姿から萎靡としていることを
完全に見抜かれていた。

「…やっぱり、お姉ちゃんが
小倉さんにゾッコンなの気にしてる？」

「え…。」

「…娘が男ばかりになってる姿見るのって父親からしたら
楽しくないもんね」

「…ま、まあな…」

翡翠の言っていることは少し外れていたが、
気が気ではないは事実だった。

「お父さん、何か悩んでるなら言ってね」

「…ああ、ありがとう」

この時初めて鉄二は家族のありがたみに気づいた。

—チーン。

「……………」

鉄二は線香に火をつけ、仏壇に手を合わせた。

目をつむり、夭折した妻の名前を頭の中で呼ぶ。

琥珀…。どうすればいい？俺は…

—そういえば俺は社長が捕まった時も仏壇にいるお前の答えを待っていたよな。

『—俺はッ…俺はっ…どうしたらいいんだ…！？』

まだ39歳だった時の俺は琥珀の仏壇の前で泣きわめいていた。

『なあッ…答えてくれよッ…。』

決して帰ってくることはないのに仏壇に縋り続けた。

『俺はッ…真珠を守らなければならない…ッ

翡翠を守らなければならないッ…』

こちらを向いて微笑んでいる亡き妻琥珀の遺影を抱きしめた。

『でも…人を殺した罪から逃れられない…ッ

どうしたらいいんだ…ッッ！！』

「一…俺は結局、罪から逃げちまったなあ…。お前なら決して喜ばないことを俺はした…。」

鉄二は永遠に答えの戻ってこない遺影を見つめ続けた。

それでも、妻は笑顔のままだった。

一ブオオオオン…

「一おっ、白馬に乗せられたお姫様のお出ましょ！」

…真珠の大学ではすっかり小倉勇作という人物は有名になっていた。

もちろん真珠が勇作とのエピソードを言い触らしたのもあるし、第一公衆面前で堂々とイチャつくので嫌でも目立ってしまう。

しかしそれが快感でもあった。

「—じゃあまた12時に」「いってきます♪」
勇作は真珠を降ろすとドアを閉めた。

シートベルトをカッチリ締めるとエンジンを吹かし
ハンドルを切った。

「—……………」
ピリリリリリリッ♪
「—…もしもし」
『ああ、小倉さん！？』
「桑島か、どうした。」
『あの田辺ってヤツいないんですよ』
「…家にもか？」
『ええ、どうすりゃいいすかね？』
…もうとっくに期限過ぎてますけど』
「…いや、俺がやるから」
『…ありがとうございます！』
「お前は関口ってヤツの所あたってくれ」
『はい！』
「…今運転中だから切るぞ」

『あ、すみませんでしたッ！失礼します』

ピッ

ツー、ツー、ツー……………。

小倉は今まで鉄二にも見せたことがないような刻薄な高利貸しの顔をしていた。

これが小倉勇作の本物の顔だった。

「一はあ〜…、今日も疲れたあ。」

ボタンッ

真珠は疲れた声を出した。

「今日も半日お疲れ様」

「…あ、でも勇作の方が疲れてるかあ。だって仕事しながら私の送り迎えもしてくれてるんだもんね」

「そんな疲れないよ、送り迎えくらい」

「ホント〜？」

「ホントだよ」

「…ねえ、勇作。」 「ん？どした？」

「…一緒に家とか住めないよね…」

「……………」

勇作は少し黙り込んだ。

「…どうかな…」

「…ごめん。それはちよつと…」

「だよね…、厚かましいこと言ってごめんね」

「…ううん、でも泊まるくらいなら良いよ」

「ホント！？」「…なんなら…今日、泊ってく？」

「え…、いいの！？…あ、でも着替えとかどうしよ…」

「これから買いにいけばいいじゃん」

「お金…持ってないけど、大丈夫かな…」

「俺がまた真珠の好きな奴買ってあげるからさ」

「ありがとー♥」

「給料入ったからさ。何でも買ってあげる」

「ー…ただいま」

鉄二は今日も疲れたような顔して戻ってきた。

「あ、おかえり」「あれ？真珠は？」

「…知らない。友達とご飯でも行ってんじゃない？」

「……………」

何かひっかかる。

真珠はこの頃友達よりも小倉ばかりになっている。

まさか…アイツに…。

鉄二は嫌な予感がした。

バツ！

慌てて居間を出て誰もいない自室に籠った。

ープルルルルッ

「……………ッ」

真珠に電話をかけるもー

『現在に電話に出られないところにいます』

「…くそっ！！」

何で出ないんだ…ツツ！！

そしてー

ピロロロロンッ♪

「……………！？」

画面の上側に小倉の名前が流れた。

カチカチカチッ

鉄二は徐にボタンを押して受信ボックスを開いた。

【From: 小倉さん

本文：夜分遅くにすいません。真珠さんは急遽家に泊まることになりました。着替えならありますので心配ありません。】

「…………っ！？」

そのメール文の下には、真珠が眠っている写真が添付されていた。

画面の向こう側に小倉の邪悪な意図が感じられた。「コイツツ…！」

真珠に手を出したりしたら…ツツ！

その時は…ツ

鉄二は小倉をどうにかしてしまいそうだった。

ギュッと携帯を握りしめ、怒りをこらえた。

…先端が鋭利なものがキラリと輝いた。

「……………」

男は無言で忍びよる。

「……………」音楽をノリノリで聞く真珠の背後に。

「……………」小倉は笑みをこぼした。

真珠との間を徐々に詰めて行く。

一歩、二歩、三歩…

「あ」真珠は背後に気配を感じて後ろを振り返った。

「…勇作。」「ご飯、出来たよ」

小倉は片手に肉の乗った皿を持ち、ナイフとフォークを左で4つ持っていた。

そう、さっき光り輝いていたのはナイフだったのだ。

「何か本格的～、うちじゃこんなの食べらんないもん。勇作は何でもできるんだね」

「お客様を持って成す料理にしては全然ダメだよ。

食べようか」「うん」

真珠と勇作は二人向い合わせでテーブルを囲った。

「一あ、この肉おいし～い」「だろ？これ、俺が資金を貸して立ち上げた精肉店の肉なんだ」

「なんていう精肉店？」「安藤精肉店」

「凄く柔らかいねえ」

「…まあ代々歴史のある精肉店だからね。」

小倉はナイフとフォークを器用に扱うと、キリキリと嫌な音を立て肉を小分けにした。

「俺は資金貸す以外にも人に仕事とかも提供する仕事もしてるんだ。」

「へえ…しらなかったなあ。…仕事かあ。私も大学卒業したらどうしようかなあ…」

「進路、困ってるの？」

「うん…。…まあでも手っ取り早くお金を稼ぐ職業とかあればいいなあとか思ったりもするんだあ」

「…。」勇作は肉を軽く突き立てて、真珠を奥から見つめた。

表情は無表情であったが何か思惑がある様子だった。

＊挑発＊

—ピリリリリッ

「一ん…」早朝、非常な時間に携帯音が部屋中に鳴り響いた。
まだ朝の6時30分だったため、鉄二の意識は朦朧としていて
いつになく不機嫌だった。

「…………ツ」

—手探りで携帯を探すもどこにあるか確認できない。
精一杯体を上に伸ばすと何とか枕元に置いた携帯に手が届いた。

「…はい」

『あ、もしもし？川上さん？小倉です。朝早くすみません』
小倉勇作からだった。
娘の真珠は今、この男の元にいる。
もしかしたら、おかしなことをされているかもしれない。

「お前…ツ！娘をどうする気だっ…！」

『どうしたもこうしたも何も。
娘さんが僕の家に来たんじゃないですか』
「そんなこと聞いてるんじゃないツ！！」
『…何を聞きたいんですか？…あ、そうそう。
それよりあのメール見ていただけましたか？』
「まさかッ…お前娘に…ツ！」
『…さあ？どうでしょうねえ。娘さんのこと
今日はちゃんと返しますから。ご安心を』
と言って電話は切れた。

「…………ツツ！」

真珠…どうか無事で…。
もし、何かあったらその時は…
鉄二はその時どうするか、心に強く決めていた。

—しかし真珠は無事、俺達の元に戻ってきた。

「ただいま～」

「…すいません。連絡するのが遅くて」

「…………ツ」

鉄二はふてぶてしい小倉の態度が気に障る。

嫁入り前の娘を男の家に泊めるというのにも抵抗があるのに、
こんな男の家に泊らせるなんてもっての外だ。

険しい鉄二の顔に気づいた小倉は、耳元でそっとうひいた。

「…………大丈夫ですよ、娘さんはまだ頂いてはいませんから。」 「…………ツツ！！」

今にも殴りたいくらい憤慨した。

鉄二の微妙な表情の変化に小倉は気づき、こう挑発してきた。

「…俺のこと、殴りますか？」

「…ツツ」

「……………いいですよ、殴っても。」

そしたらあなたの過去を娘さん二人に話すまでです。」

だが、そんなことで殴って今までの努力が水の泡になるのはもっとばかばかしい。

固めた握りこぶしをこらえた。

「あ、そうだ…。僕、鉄二さんに言わないといけないことがあったんだ…」

「…。」

小倉は喋る声の音量が急に普通に帰り、ズボンのポケットを探り始めた。そこから、出てきた4枚のチケットを差し出す。

「…温泉旅行の券が当たったんですけど行きませんか？」

「え？」

「ねえねえお父さん、行こ!行こ!ちょうど4人分、あるんだってさ！」

「…………!？」

—なんと、鉄二が知らぬ間にこの旅行話が着々と進んでいたのだ。真珠を丸めこみ、家族を巻き込んでいくような仕組みで小倉は攻めてきた。

「それに、券が4枚ありましてね、鉄二さん、翡翠ちゃんと、真珠と俺とで行けそうなんですけどどうですか？」

「お父さん久しぶりに家族で旅行行こうよ！」

「…あ、ああ…」

「翡翠も行くよね!？」

「う、うん…私は学校がない日なら…」

—もし、これを断って真珠がこの男の食べ物にされ、秘密まで

ばらされたら元も子もない。

自分の監視の目があれば、食い止められることがあるはずだ。

これも家族を守る為だ…。

「あ、ああ。じゃあ行こうか？」

* 奇妙な家族旅行 *

一川上家は、小倉から手渡された旅行券を手に多くの車が行き交う高速の上を車で走っていた。

「—うわあ、楽しみだ〜」

真珠は大好きな小倉といられるうえに旅行もできることであってかなりの上機嫌であった。

車内での間もそのテンションを持続し続け、一人でかなり盛り上がっていた。

「……」

一方の翡翠は、あまりなじみのない勇作が着いてきているということもあって、自分の家の車内でありながら自分らしくふるまえずにいた。

鉄二はそんな翡翠を上回るほどの緊張感で汗が首元から胸を伝っていくほどだった。

手汗で今にも滑りそうで、握っているハンドルが滑ってしまうのではないかと危惧した。

「川上さん」

「は、はいっ！」

「一次、あの角を左に曲がってください」

「あ、は、はい…」

—緊張のせいかな、どこか手元がおぼつかない。

普段なら行ってない場所でもこんなにぎこちなくないのに。

「……………」

ミラー越しに見える男の顔は、至って冷静な顔だった。

何を考えているのかすらも、こちらは察しがつかないくらいに。

鉄二だけがバカみたいに緊張したまま、例の旅館に着いた。

「—うわあ〜!おっきい〜!」

「…ここの旅館は老舗だからね。料理も凄く美味しいよ」

「今からムッチャ楽しみだー♪」

体でその喜びを表現する真珠を連れ、御一行はフロントへ向かう。

一鉄二達は旅館に着くとすぐさま、おかみに予約していた名前を告げ指定の部屋に入る。

その部屋の窓からは、美しい山景色が一望できるようになっており、そこは大変絶景であった。

「—うわあ—！凄く綺麗だね！！」

「真珠が喜ぶと思ってさ」

「……………」

この男は娘を喜ばせるたび、鉄二を縛り付けるような細工を仕掛けていたのだ。何とも憎いことをする男である。

「お父さん、ここにこれてよかったね！」

「あ、ああ…」

けど、ここで心にもないことでも返事をしておかないと今までの俺の努力は全て無駄になってしまう。

きっとそれさえも踏まえた計画なのだろう。

今小倉はその俺の心の表情さえも全て読み取り、ほくそ笑んでいるのだ。

「…そろそろ、お風呂の時間にしませんか？」

「—あれ?勇作?行かないの?」

「ん?…まあ…。」

いざ温泉に入るという頃になった時だった。

父・鉄二は飲み物を買に行くと言ったきり不在で、
小倉と真珠、翡翠の3人だけが部屋に取り残されていた。

温泉旅行を提案したはずの小倉本人は温泉へ真っ先に
行こうとしないのだ。

真珠は、その理由を聞いたのだが返答までに少しの間があった。
しかし、小倉から予想もしていなかったこんな一言がこぼれ出た。

「俺…。背中に酷いケロイド状の火傷があって…。それ、他人に
見られるのがちょっと嫌なんだ。それで、人気がなくなって
からにしようと思って…」

「…あ、そうなんだ…。」

真珠は少し、まずいことを聞いてしまったが、
小倉が気にしないように促したおかげですぐに普段の表情に
戻った。

「じゃあ、勇作。行ってくるね」

真珠と翡翠の姉妹は女湯へ行ったが、小倉は訳ありの為
温泉につからなかった。

鉄二はそんなやり取りがあったことも知らず、
真珠と翡翠が風呂へ向かった直後、缶コーヒーを
買いに戻ってきた。

「—あ…っ、どうして君が…。温泉には行かないのか…?」

「……俺、いいです。ちょっと用事があるので。」

鉄二が戻ってくると同時に部屋を後にして、どこかへ行った。
缶コーヒーと新聞紙を片手に持つ鉄二はその後姿をみて内心
ホッとした。

鉄二がわざわざ自動販売機に脚を運んだのは、あの男と出来るだけはち合わせぬようにするためだった。

もし、あの男が今入るのなら深夜に入るつもりだったが
どうやら用があるようで温泉には入らないようだ。

何故、あんな男と同じ湯につかり背中を流さなければならないのだ。

それだけはどうしてもプライドがどうしても許さない。

たとえ七面倒くさいことでもやることにした。

「一ふう…。」

ここの温泉はとてものがらんとしていた。

男湯には老人が数人いるだけで、自分を含めても数えるほどしかない。

やっと、自分だけの空間を死守できた…

そう心を休めていた時、

「鉄二さん」

「……小倉っ!?!」

一悪魔のような男は、鉄二の安らぎの時間の空間を壊し、執拗に膠着してきた。

しかも小倉は何故か上半身にバスタオルを巻き、蠱惑的な姿勢で鉄二の前に姿を現していた。

「大丈夫ですよ、バスタオルはこの旅館の許可をきちんととってます」

「……そんなこと、どうでもいい」

「……何で、俺がこんなところにあなたのご家族を呼んだのかって思ってるんでしょ」

「…何が目的だ」

「それは、親睦を深めるためですよ。それ以外何があるというんですか?」

この男の言い草はどこまでもしらじらしく、その虚言を平然とした顔で言えるその神経に慄然とした。

「一あ…。そうそう、鉄二さん。娘さんには秘密ですよ。僕、真珠さんには『背中にケロイド状の火傷があるのを誰にも

見られたくないから』って言って、風呂には入らないで部屋にいるって言ってるんですよ…。」

—その男が背を向けて立ちあがった時、俺は見た。その男が風呂から出るのと同時にバスタオルが剥がれた。きちんと見る機会もなかった奴の体を目の当たりにした。

「僕たちだけの秘密ですよ?」

その男には、背中から太ももにかけて登り竜の刺青が描かれていたのだ。その竜は全てを食い荒らそうとしていた。

「……………っ!!」

「お背中流しますがいかがですか?」

男の秘密

「—あっ、勇作う～！温泉入ったの？」

「ああ、なんか入ってた人も少なかったしね。入ることにした」

「そっか～！そうなんだ、よかったね！」

—真珠は自分の父親が男がまたと禁断の秘密を共有しあったことなど、露知らず相変わらず能天気だった。

真珠のこの調子のよさは、時に人の負担を軽減させる時があるが時にそれが物凄く自分達を更に追い詰める時がある。

今、まさに後者の方だ。

「真珠は気持ちよかった？」

「うん！ここの温泉、最高！またこのメンバーで来たいなあ～」

「…そっか、喜んでもらえて何よりだよ。」

「……………」

真珠と勇作の他愛もない会話を横で耳にする鉄二の微妙な表情変化を見逃すことはなかったのは、翡翠だった。

翡翠も勇作の笑顔を完全に信用しることができない人物の

一人であり、姉と温泉に入っている間も勇作の名前を連呼していたのを見て少し慄然としていた。

勇作の話題が過剰なほど多いのが、ちょっと異常とも感じてとれた。

勇作という男ののめりこんでいく姉の姿を見て、これは一つの中毒ではないのかと不安で仕方なかった。

「—翡翠ちゃん、あっちにマッサージ機あるけど興味ない？」

「あ…。」

「翡翠もおいでよ！」

「う、うん…」

けど、家族である自分が姉の幸せを否定するのはいいことではないと感じていた。けれど、あえて肯定もしなかった。自問自答では、『姉が幸せなのならそれでいい』と無理やり理由づけてはそれについて深く考えこまないようにしている。

「お父さん来て、来て!こっちに面白いゲームもあるよ!」

「あ、ああ…」

真珠一人の恋の暴走は、いつしか父を完全に蜘蛛の巣に絡めつけそして苦しめていた。
…まさに小倉の思う壺だった。

「—うわあ～、寝る前なのにいっぱい汗かいちゃったあ～」

「また、汗流してくれば?」

「いいよ～、なんか面倒だし」

—就寝前。皆で川の字に描くように並べた布団の上に、自分の身を横たわせると部屋の電気を消した。

「おやすみ～」

「……………」

鉄二は真珠の方を見た。すると真珠は実に気持ちよさそうに寝ており、いびきまでかいていた。

…全く、無智というのはこういうものなのか。

その無智さえも鉄二を逆に苦しめていた。

こっちは気になって仕方なくて、なかなか寝付けないのに人質の真珠は何も知らず眠っている。

でも逆に無智ならどこまでも無智がいい。

中途半端に真実を知られてしまうのであれば、最後の最後までこの嘘を突きとおしたい。

この地獄がどこまで続くかはわからないが、どうか終りまで…。

そんな願いを心の中で悶々と考えながら、鉄二は麻酔薬を打たれたように闇の世界へ落ちて行ったのだった。

一皆が寝静まった午前2:00、丑三つ時に男はどこかへ行こうと
していた。

お手洗いなのかもしれないが、男は不審な行動をとっていた。
鉄二や真珠、翡翠たちが眠っているのかを確認しているのだ。

その挙動不審な行動は、何か目的があるのだろうと思わせた。
皆が起きる気配がないの見計らうと、男は横たわっていた体を
起こし、とある場所へむかったのだ。

しかし、
部屋を出ていくのを見逃さない人物が一人いた。

「……………」

一小倉…さん?

それを目撃したのは翡翠だった。
精神的にも肉体的にも疲労して眠りについた父と、遊び
ほうけて寝てしまった姉を横にまだ眠れていなかった。

どこへ行くのだろうか?こんな時間に。
小倉のここ数時間の行動があまりに不自然だったのを不信に思い、
翡翠は、ぼやけてよく見えない視界だけを頼りに小倉の後を追う
ことにした。
尾行しているのを気づかれぬよう足音を殺し静かに後をつけた。

常に不敵な笑みを浮かべ、どこか余裕さえも感じさせる
男・小倉勇作は堂々とした足取りで廊下を歩いていた。
彼が向った場所、そこは見たこともないような空間だった。

「…待ってたよ、勇作。」

「宏美」

勇作は、自分達が予約した部屋から大分離れた部屋に
訪れていた。

その一室だけ普通の旅館とは言い難い雰囲気醸し出していた。

「…早くおいで」

「ああ」

縦一列に敷かれた敷布団を跨いで誘惑する女の体に手をまわし、
男は女の乳房を鷲掴みにした。

女は感じる快感に声を上げずには
いられなかった。

勇作は宏美を抱き寄せるとディープキスをはじめ。
舌を絡めあう如何わしい音と喘ぎ声が自然と部屋の中に漏れた。
首筋を舌でたどり、小倉の体に刻まれた龍のように体に巻きついた。
毒蛇とも言えようか。
女は、男の毒牙に体を冒され虜になっていく。

「—はあっ…はあっ、はあっ…」
宏美は勇作に跨り、思うがまま腰を動かす。
何かが擦れる音が大胆に聞こえた。
ランプに照らされる裸体。
裸体には、くっきりと刺青が刻まれている。
二人は同じ世界の人間であることを示していた。

「—……………?」
そのランプが放たれる部屋は第三者が覗けるような
隙間が少し開いていた。
先程まで尾行していた翡翠は、どこからともなく漂う異様な
空間を覗くことに少し躊躇していたが勇気を振り絞り、
遂に翡翠はその部屋で起こっている場面の一部始終を
全て目の当たりにした。

「—はあっ…はあっ、はあっ…」

—そして翡翠は生まれて始めて他人の情事というものをこの目で見た。生でこんな現場を見るのはもっと初めてである。今まで神聖なものの象徴として見ていた行為の為かこの一瞬の出来事を目にしただけで、今まで見てきた夢や理想が全て崩壊した。

「…………っ！」

翡翠はその場面を見ていられず、音を立てずに気づかれぬようその場から飛び出したのだった。

「—今日は何でここに来たの?」

「…俺の可愛い彼女とその家族と温泉旅行に来てねえ。

それでだよ」

「…へえ、あんた彼女いるの?」

「まア、一応…。」

小倉は刺青の入った裸体のまま、煙草をふかしていた。

煙草が燃えカスになると、部屋を出る間際に

その刺青を隠すようにワイシャツを着た。

「じゃあね、バイバイ」

「…バイバイ」

「…あ」

そして部屋を出ようとした間際だった、

「…松名さんによろしく」

「言っとくよ」

勇作は『松名』という人物の名前を宏美に言い残すと何もなかったように部屋を後にした。

旅館の廊下に足の擦れる音が聞こえる。

ここは普通の旅館だ。特別な場所ではない。

しかし、小倉はあの宏美という女とのあいびきの宿に
していた。

さっきの宏美という女は、東京で名を知らしめるヤクザの松名
という男の妾であった。

松名と勇作は同じ世界の間人ということもあり、親交がある。
川上家に手渡した旅行券は偽物であり、小倉の本当の目的は
あの女と会う為の場所であった。

用を足して、自分の部屋に戻る頃になると時間は夜の4:00を
回っていた。

「……………」

部屋の引き戸を静かに開け、布団に潜り込む小倉。

その小倉の姿をしっかりと翡翠は目に焼き付けた。

そして、あのさっき目の当たりにしたものは夢ではないと
確信した。

くっきりと見てしまった翡翠は眠ることができず、
夜通しあの場面が脳裏に浮かぶ。

翌朝、どのような顔で小倉と顔を見合わせ朝食をとればいいの
だろうなどと余計なことを考えてしまう。

それらのせいで結局、朝まで眠れなかった。

—翌朝。

「……………」

波乱の温泉旅行も今日で幕を閉じる。

ここの朝食を食べると、全て終わるのだ。

鉄二と翡翠は内心ホツとしていたが、真珠と言えば
修学旅行最終日の現実を受け入れられず涙する学生と
近いものがあった。

「—ああ〜っ…、ここの料理が食べられるのも最後なんだ
ねえ〜……………」

「な?言った通り、老舗の味だっただろ?」

「もう、本当にそうだった」

「……………」

—老舗料理だの良い温泉の湯だのそんなのどうでもいい。
早くうちへ帰りたい。そしてこんな男とおさらばしたい。

鉄二はそう思っていた。

「……………」

—やっぱり、うまく目を合わせられないよ…。

翡翠はまだ昨日の出来事を引きずっているせいか小倉の目を見るのが何だか怖い。

けど、何故か怖いはずなのに彼の方を見てしまう。

そのせいで、

「あれ?翡翠ちゃん、あんまり進んでないね。口に
合わなかった?」

「あ…。」

「本当だ、翡翠。食べてない。」

「え…、そ、そんなことはないよ?」

と、必死に自分を取り繕い、出た料理を口にかきこむ。

小倉は昨日翡翠があの一部始終を見て動揺しているのを知っているかのように顔を覗きこんできているような気がするのだ。

「……………」

そのどぎまぎした様子を次は鉄二が見逃すことはなかった。翡翠が何となくだが、小倉に心をあまり開いていないことは前々から感じてとれたが、まさか昨夜知らないうちに翡翠に何かしたのでは…。

そんな悪いことをただただ妄信してしまう。

《一続いてのニュースです》

「...……。」

一帰りの車内。

距離もそろそろ縮まり始め、鉄二も大分ホッとしてきた頃だった。
静謐になった為か車内のラジオが、ひときわ存在感が大きくなった。
さっきまで元気に話していた真珠は疲れたのか眠り初め、
鉄二、小倉、翡翠の3人だけがこの空間に取り残された。

《今日未明、人の骨と思しきものが〇〇川で発見されました》

しかも、その流れてきたニュースはショッキングな内容であった。
その人骨と思しきものは体の一部だけであるらしく、他の部位は他にあると
報道された。

体をバラバラにされた、ということか？

...そう想像しただけでも吐き気を催しそうだった。

翡翠も曇った顔を見せていたのに、やはりあの男だけは冷静だった。
しかも、この男はこのニュースの感想を述べ始めたのだ。

「一…僕なら、そんなところに放置しませんかね」

「………ッ!？」

「よっぽど効率が悪い奴がすることですよ…。そんな人目のつくところに放置するなんて」

「や、やだ…。小倉さん。そんな怖いこと…。やめましょうよ」

翡翠は、不快な話題から必死でそれそうとした。話はそれで終わったもの、嫌な不快な空気はずっと続いたままだ。

「………。」

カーブミラーから見える小倉の顔を鉄二は伺った。

鉄二はこの男にそこにいるだけで他に威圧感や、恐怖を与えるそのオーラを感じていた。

本人はどういう目的でやっているのか知らないが、口に出すひとつひとつの言葉が人を追い詰めるのだ。

さっきの感想にしても…。あまりに現実味がありすぎる。

さも、殺人を経験したことがあるかのように…。

「………。」

—あれ…？

翡翠も何かに気づいた。

車の窓から頬杖をつき、外を眺める小倉の横顔。

彼の耳元には、白くて長細く、杖のような形のピアスが耳に刺さっていたのだ。

店で購入したような安っぽいアクセサリーではなかった。

それは、どこか人の骨さえも連想させるような…。

「………ッ！」

そんなことを想像すると、翡翠の背筋は一瞬にして凍りついた。

さっきあんなショッキングなニュースを聞いたから？

だから、そんな怖いことを考えてしまうのだろうか…。

「ふああああ…」

真珠は、そんな空気にもなっていることも露知らず呑気なあくびで目を覚ました。翡翠は、小倉の耳の白いピアスにとんでもないことを妄想し鉄二は小倉の存在をますます奇妙に感じていた。

「ねえ、お父さーん。あと、いつくらいでつくー？」

「あ、ああ…後、30分くらいかな」

「そっかー…ふああああ」

と、言うともた静かに目が虚ろになった。

「…ん？勇作～。その耳につけるの何～？」

「…。」

「………ッ！」

一真珠は翡翠が今、一番触れられたくない話題に大きく触れた。動揺は隠せず、尋常ではないほど脈をうつ心臓が破れそうになった。

「ねえ、それどこかで売ってるのー？」

「………。」

「………ッ!!!」

「……さあね」

「……」

「何それーっ」

小倉は、口角をあげ曖昧な答えを返すだけだった。

後味が悪いまま、鉄二率いる一行は過酷で波乱に満ちた温泉旅行を幕を閉じたのだった。

翌朝

旅行から戻ってきて2日後。
学生や会社員はまた慌ただしい一週間を送る。
まだきちんと休息がとれていない鉄二と翡翠は、
頗る疲れた顔をしていた。

ジャムの残り少ない中身をスプーンでかきだす瓶のガラス音しか
聞こえなかったが、その静謐なひとときは破られた。

「あ、勇作だ」
この静けさを破ったのはまたあの男。
真珠は嬉しそうにインターホンの方に駆けて行ったが、
鉄二は少しも嬉しくなかった。
またあの男と顔を合わせなければならんのか、と。

「お父さん、翡翠、行ってきます」
「行ってらっしゃい」

真珠は朝から早々と支度して家から出て行ってくれることは、
嵐が過ぎた後の安堵感とよく似た感情だった。

鉄二は内心ホッとした顔で、ジャムの瓶の中を再びかきだした。

「一旅行で疲れてる？」

「ううん、全然!…でも、あたしだけかなあ。翡翠とかお父さんはすっごく疲れた顔してたけど」

「…ああ、なんか悪いことしちゃったなあ。鉄二さんは仕事があるし翡翠ちゃんも、真珠も学校があるのにさ。

返って悪いこと

したね。」

「そんなことないよ～」

一真珠を大学へ送る小倉の車中で、二人は旅行の思い出話についてあれこれ語っていた。

しかし真珠は、旅行の間中この男が自分の父を牽制していたことなど何も知らなかった為大いに旅行の思い出話で盛り上がった。だが、そんな楽しい話もネタがつき始めてきたころ、勇作は真珠にある話を持ち出した。

「一あ、真珠ってさ前仕事探してるとか言ってたじゃん？」

「うん、そうだけど…」

「俺の経営してる店でバイトしてみない？」

「ホッ、ホント!？」

一男は、真珠にウエイトレスの仕事を薦めた。

そこまで遅い時間ではなく、翌日にも差し支えのない程度のバイト時間であったし、ウエイトレスの制服も可愛らしく何より働き口をそろそろ探していた真珠にとっては何とも便宜な話であった。

「うん、やってみようかな」

「ホント?じゃあ、今日見学にくる？」

「うん!」

「けど、ちゃんと鉄二さんに相談してみてね。結構夜遅いから」

「分かった♪」

「……………」

—真珠はまたも勇作の罠にひっかかった。
そして鉄二を追い詰める道具に扱われていることに少しも
気づくはずがなかった。

何の疑いもなく約束通り今日の夜、勇作の経営しているという
店へ向うことになった。

「—ここだよ」

「ここが…」

勇作が経営しているという例の店。

ネオン街の一部として光を放っていた。

【ラピス・ラズリバー】

看板はチカチカと輝き、ナイトバーという感じだったが、不思議と如何わしきはなかった。

「—うわ…」

中に入ると、女の子たちがウエイトレスの衣装を着て
客人の注文をせっせと聞いていた。

店内は少し薄暗く、人がひしめきあっているのにも関わらず
そこで働く女の子たちは遠くのお客にも丁寧に対応し、
真珠はとても感心した。

「—…こんな感じなんだけど」

「へえ…衣装かわいい」

アイドルみたいな衣装にも真珠の心は掴まれた。

自分も一度は着てみたいなど考えたことの

あるようなものだったので、『やろう』と一気に意思を固めた。

「時給もいいしき、ここはお昼時は普通のバーなんだけど夜はこうやってライトアップしてナイトバーみたいに姿を変えるのが面白って客に結構評判なんだよ。」

勇作の売りに真珠はグツときた。

「どう？やってみない？」

「やってみたい」

もちろん真珠には迷いはなかった。

答えは即答だった。

「じゃあ、来週からココに来て。

勿論俺が送って行ってあげるから」

二人は契約をすると店内を出た。

真珠や勇作が店内から出ようとした頃、

ちょうど同じタイミングで店内に入ろうとしてきた青年と目があつた。

目が少し合ったので真珠は会釈をすると、向こうも丁寧に会釈をしてくれる。

右肩にリュックをかけ、セカセカと早い足取りで店内へ入っていった。

あんな普通っぽい感じの大学生もここで働くような場所なのだからきっと大丈夫だと改めて感じた。

…でもやっぱり、もう一度店をマジマジ見ると
何だか如何わしい印象も感じさせるなあとも感じた。

でもそんなことは気にしたところで意味がないので、
そんなこときっぱりと忘れ次週から働くことになったのであった。
こういうことは、父にも翡翠にも報告しておくべきだろうと思って
一応話しておいた。

「一…バイト？」

「うん、これからすることに決めたの。だから夜遅いと思うから。
ご飯はこれからいいよ」

しかし真珠は出来るだけバイトの内容には触れないようにして
父と妹に伝えた。やっぱり親というものは特殊な仕事を首肯しか
ねるだろうと感じたからだった。

「へえ…どんなバイトなの？」

けど翡翠は曖昧な姉の説明に疑問を持ったのか、
細かいところまで踏み込んできた。

だが、それでも真珠は完全に理由を明確にせず言葉を濁すだけ
だった。

「まあコンビニのバイトよ」

「ふうん」

「けど真珠、夜のコンビニは気をつけるんだぞ。

柄の悪いのが沢山来るんだから」

「分かった、分かった。お父さん。

気をつければいいんでしょ？」

「……………」

—だが鉄二は世の中に小倉よりタチの悪い奴はいないだろうと
思っていた。

どんな厳つい奴だろうが、小倉よりは何倍もマシだろうと。

鉄二は裏で小倉が糸を引いていることも知らず
娘のバイトをあっさり許してしまった。

それに、他のことをして少しでも小倉への興味が薄れればいい
と考えていたためか非常に便宜な話だと思えたからだった。

初日

— 1週間後。

「一新しく入った川上真珠さんと坂巻寧々さんです」

「よろしくお願ひします」

— 新入りは真珠だけではなくもう一人坂巻寧々という同世代の女の子が一人入ってきた。

気だてがよさそうで

顔合わせの時からとても雰囲気よかった。

「じゃ、分からないことがあったら児玉さんに聞いて」

「はい」

「がんばってね」

と言ひ残すとチーフの植木さんは控え室から出て行つた。

「…川上さん、坂巻さんよろしくね」

「あ、よろしくお願ひします。川上真珠です」

「坂巻寧々です」

先輩の児玉さんもとても親切そうで、それに他の仕事仲間の人もとても愛想がよかった。

「じゃあ、仕事に入りましょう」

「いらっしやいませ」

夜の7時になると仕事を終えたサラリーマンや仕事帰りの人がゾロゾロと入ってくる。

「一ビール三人分～」

「は～い！」

注文は思ったより次々と来るものなので、
可愛い衣装を着て働いているという意識を忘れてしまう。
真珠が想像していたアルバイトとは遥に違った忙しさ
だった。何より、初心者ということもあり手元がおぼつかない
のだ。

「うわっ！！」

「あ…」

そんな時、間悪く向こうの方で朋輩の坂巻が運ぶのを失敗した。

新人の世話役の児玉は新人の坂巻に容赦なく憤怒した。

真珠はその場面を見て、ますます自分は失敗などできなかった。

「もお～、いいわ、あんた。他のことやって！」

「すみません！」

と、すごすご坂巻はその場から立ち退いた。

「……………」

ひょっとして、自分はこんな世界に足を踏み入れたがっていたのか…と思うと、以前の自分の考えが甘かったと感じた。

アルバイトとはいえ、ここはちゃんと給料をもらって働いている。だから、ヘマできない。

身を引き締めて、仕事にかかったが、

「うわっ！」

やはり目の前で起こっていたことの二の舞になってしまった。

「あら、川上さん！」

もちろん世話役の児玉は傍に駆け付けた。

いよいよ自分も怒られる、そう覚悟していたが、

「いいのよ、私が後始末はしておくから。

川上さんは他の注文でもとって」

「は、はい…」

怒られると思いきや児玉は笑顔で真珠のフォローをした。

さっき叱られていた坂巻が目の前にいるだけに、何だか自分が悪い気がした。

「一お疲れ様」

「お疲れさまでした」

先輩達が次々と控え室を出て行く。その中で、坂巻と真珠はまだ化粧を落とすのに時間をかけていた。

「あの、今いいかな？」

「はい？」

後ろを振り向くと二人の世話役の児玉さんが居た。

「児玉さん」

「二人にはまだ言ってなかったんだけどね、来週から『総選挙』がはじまるの」

「…そ、総選挙？」

テレビでは選挙シーズンになるとよく聞く言葉だが、普段ではあまり聞き慣れない言葉だった。

「この店はねお客さんにどの子がいいか投票してもらうの。一位～三位には賞金も貰えるのよ」

「へえ…、これは全員エントリーなんですか？」

「ええ。そうよ」

「あ～なんか自信ないなあ…最下位になるかも…」

と坂巻は不吉なことを呟く。

すると、児玉は重々しくこう呟いた。

「…ああ、ホント最下位とブービーになるのは本当に気をつけて」

「…え？」

「…とんでもないペナルティがついてくるから」

「ええっ…！？」

坂巻と真珠は見合わせ、怯えた顔を見せたが、児玉は二人にきちんと説明した。

皆の中に競わせないと、気が引き締まらない従業員が毎年一人か二人は存在するらしい。そういう人たちの気を引き締めてもらう為の恒例の行事なのだそうだ。

「…あ、脅かしてごめんなさいね。それに初めのうちは仕方ないわよ。何も分かっていないんだし。ブービーとか最下位いを取り続けなければいいのよ」

と、二人に言い残すと兎玉は先に控室を後にした。

「…でもペナルティって一体…」
けれど、具体的に教えてくれなかったことが疑問に残った。

「一さ、真珠。帰ろうか」

「うん」

真珠と勇作は車へ乗り込んだ。

「…ねえ勇作」

「ん？」

「総選挙で最下位取り続けるとどうなるの？」

「ああ、もうその話聞いたのか。

…最下位取り続けると結局どうなるかって？」

「…うん」

やはり真珠はふに落ちなかった部分を勇作に詳しく聞き出そうとした。兎玉が言葉を濁した部分を、勇作は仔細に述べた。

「…やめてもらおう限りだよ」

「やめる？バイトを？」

つまり真剣に仕事しないといくら本人が続けたくても、強制的に辞めてもらおうということだった。

「ああいう接客業はお客様の評価が一番だからね。」

「…そういうことか」

「うん、そういうこと。分かった？」

真珠は少しホッとした。

ちゃんと仕事をすれところを見せていればお客さんにも伝わるだろうし評価もちゃんと得られるはず。

ペナルティはきついが想像していたほどでもなかったため、少しホッとしていた。

＊総選挙＊

「一川上さん、坂卷さん」

「はい？」

バイトを始めてまた一週間が経った頃、兎玉からまた総選挙についての説明を受けることになった。

「一えっとね、総選挙は明後日から丸二週間の間行われるの。結果は総選挙終了後に投票数と順位が店内に張り出されるから。」

真珠と坂卷は初めてのことであったので、いつになく真剣に聞いた。やはり、投票数を上げるのは印象や接客態度、身だしなみなのだと言う。あと、プラスアルファとして教えられたのはこういうことだった。

「どれだけ自分を相手に売り込むかよ。売り込む方法は何でもいいわ。ただし、他のメンバーのイメージダウンに繋がるようなことは絶対にしないこと。いいわね？」

「はい！」

「一初めての総選挙、お互い頑張ろうね！」

「うん！」

真珠と坂卷は、説明を受けた後総選挙に対しての意欲が横溢としていた。顔を見合わせ元気に仕事場に入ったが、この時二人はまだ分かってはいなかった。この店ではじまる総選挙の本当の意味を…。

「—お疲れ様〜」

—この日は難なく仕事を終え、アルバイトをして期間もなかったが
朋輩である坂巻と共に真珠はウエイトレスとしての
仕事をこなした。

「—じゃあね、真珠ちゃん。寧々ちゃん」

「お疲れさまでした」

帰り道、途中まで自分を含む児玉、坂巻で家路へと向かっていたが
児玉とは途中で別れた。

児玉は二人と別れて数m歩いたころ、
殷賑な夜のネオン街に足を踏みこんでいた。

「—マヤちゃん、行こうか」

「社長さん。」

店先で児玉を待ちかまえていたのは、割腹のよさそうな
中年の親父だった。二人は肩を寄せ合い、夜の如何わしい街へと
姿を消したのだった。

一児玉が中年親父と夜の街に消えて行って数日が経過。
総選挙もそろそろ佳境に入るところ、
ウエイトレス達の控え室はいつになくピリピリしていた。
しかしこの一触即発とも言えよう空気の中には新人の
真珠と坂巻の姿はなかった。
普段面倒見のいい世話役の児玉も昨日何かあったことを表すかの
ごとく、いらついた表情が全てを語っていた。

「…やってらんねーわ。」

「……………」

店のウエイトレスの一人直美が煙草を一本取り出すと
ライターをつけ、煙草をふかし始める。
するとそれを見た児玉は、
「…ちょっと直美。こんな所で煙草なんてやめなさい。
新人がきたらどうするつもり?」
と、時と場合をわきまえない直美に注意を促す。

すると、逆上した直美の口からとんでもない一言が飛び出した。
「あ?なんだこの淫売婦が」
「なっ…!」
「全部知ってんだよ、バーカ。」

直美は自分の鞆を探り、数枚の写真を取り出すと、
児玉本人に手渡した。
「…………なっ…………!」
「ホラ、凶星。お前この前この親父と何してたんだよ?」
それは、昨夜児玉が真珠らと別れた後社長と夜の街へ消え
ラブホテルに入るまでの経過が写真に収められていたのだ。

「こんなんでもりーダーぶってんじゃねえよ」

「こ、こんなの…出鱈目よ!そうにきまってる!」

「売春で得点稼ぎかよ。この淫売女が!!」

と言って、直美は一方的に見玉に掴みかかった。

「ちょっと…やめなさい！」

仲裁に入ろうとしても、二人に突き飛ばされ、誰もが体勢を崩す。
客の前では粉飾してふるまうウエイトレス達の間では、
熾烈で醜悪な首位争いが繰り広げられていた…。

そんなことも知らず、真珠は仕事の控え室へ向った。

「失礼します」

「は、はいどうぞ」

真珠が入ってきたと同時に先輩たちの声は裏返し、互いの胸倉を掴んでいた一触即発の雰囲気が一瞬にして消え去った。

先輩達は真珠に聞かれたかもしれないということで顔が不自然にひきつっていたが当の本人はそんなことにも気付かず、真珠は仕事の準備を始めた。

バーテンダー

「—あら、仁。バイト？」

「ああ」

「…ごめんなさいねえ、あなたに迷惑かけて。」

「いいよ、母さんは体が弱いんだし。

真百合と俺の学費は俺が払えばいいんだからさ。」

「ごめんなさいね、ゴホッ」

「…もう、母さんは寝てて。俺は行ってくるね」

「…いってらっしゃい」

「……………」

—音羽仁、20歳。現在大学3年生。

自分が小学4年生の頃、父親は死亡。

体の弱い母親が女手一つで俺と妹を育ててきた。

俺は奨学金を貰い念願の大学に入学した。

それを返すことと家庭を支えるために

俺は今、ラピスラズリというバーのバーテンダーをしている。

灰色のパーカーとジーンズという軽装で
東京の街を歩くと別の意味で浮くが、そんなことは気にせず
紫色のリュックを肩にかけ、バーの店内へ入って行った。

「……」

店に入ると、自分が一番乗りだった。
閑散とした店の控え室でバーテンの格好に着替えると、
時間つぶしの為グラスでも磨き始めた。

「……………」

…もう少し給料が高くて楽な仕事はないものか。
それが仁のささやかな願いだった。

誰もいない店で布が擦れる音が響いた。

ドアから誰か人の気配を感じたので、衝動的に

「お客様、まだ準備中で一……」

と言いかけると入ってきたのは、同じ店で働く女の子だったのだ。

仁は少し恥ずかしくなり赤面した。

だが女の子は何の反応もなく控え室の通路へ歩いて行ったので

少し安心した。

ああ…、確かあの女の子って経営者と一緒に

店に入っていていた子だっけ。

前に目が合って会釈してくれた子だ…。

仁は恥ずかしいのを紛らわすためにどうでもいい回想に浸りながら、

グラスを拭き続けたのだった。

「マスター、マンハッタン一つ」

「はい」

夜の7時を回る頃には店内は殷賑としていた。
客の大多数が仕事帰りのサラリーマン達だ。
このウエイトレスが男客の相手をするのが
うちの店の基本だ。

「……………」

みんな、男客の笑顔を振りまき酒を薦める。
女というのは大変なものだ。
どんなに客の相手に時間をとられ、疲れようが注文があれば
そこへ駆けつける。
そんな仁は客に作ったマンハッタンを差し出すだけだった。

「はい、お待ち」

「—お疲れ〜」

「お疲れ様です」

「……ふう」

…疲れた。今日も。

家に帰れば講義の復習をもう一度しなければならないし…

家に帰ってもやることは沢山だ。

母さんはちゃんと寝ているだろうか。

妹は、まっすぐ家に帰っているだろうか。

自宅に戻れば気がかりなことはたくさんあった。

考え事をしている隣から同僚が仁の肩を叩いた。

「どうした〜？そんな浮かない顔して〜」

「高橋。」

「恋の悩みなら聞くぞ〜？」

「…そんなんじゃねえよ。」

「じゃあなんなんだよ。言ってみろよ。」

缶コーヒー奢ってやるからさ」

「……」

—仁は奢るという言葉に弱かった。

友人もそんな仁の特性を知っていて口にした言葉だった。

友人の高橋に胸のうちを全て打ち明けることにした。

「一ほら」

「…ありがとう」

友達は温かい缶コーヒーを仁に手渡すと、早速本題へ移った。

仁は手渡されたコーヒーを少し飲んでゆっくりと口を開いた。

「…俺…、今の仕事してていいのか悩んでるんだよな…」

「え？」

「…夜の仕事ってホントキツイんだよ。

俺の場合午前中大学の講義でてからだし、

…でも家庭を支えなきゃなんないし…やめらんないしさ…」

「…」

「ないかな？学業と両立出来て体もキツくない仕事。」

「…俺は…そんな都合のいい仕事があるのは知らないけど…」

「やっぱ、そうか…」

—そんな都合のいい仕事などあるはずないか。

仕事の内容に見合った給料しか支払われないか…

と、希望を失いかけていた時。

高橋の一言でまた希望が見えた。

「あ、でも経営者なら知ってるんじゃない？」

「お、小倉さん？」

「ああ、あの人仕事を紹介する仕事もしてるそうだしさ」

「へえ…」

「話…してみたら？」

「…ああ、そうか。そりゃいいな」

仁はたまに他人に悩みを打ち明けてみるもんだな、と感じた。

近々小倉さんに連絡しようと思った。

投票結果

—総選挙最終日。

遂に運命の結果発表。

泣いても笑ってもこれが最後だ。

「投票結果を発表する」

「……………」

真珠は胸が高鳴った。

最下位だったらどうしよう……。

必死で天に願った。

貼り紙が開かれる。

全ての結果が公になった。

- ・一位 児玉マヤ
- ・二位 藤崎直美
- ・三位 川上真珠

「キャアアア！！」

「すごーい！！」

「真珠ちゃん、やったね！」

「……………うそツツツ……………」

真珠も実際信じられなかった。

ほどんどのメンバーが先輩達で、それらを押しつけて

堂々の3位というのはあまりに嬉しかったためか、結果に

狂喜するほどだった。

「うわーん、私最下位だよお」

「坂巻さんもこれからよ」

一緒に入ってきた朋輩の坂巻は最下位だったのにも関わらず、
自分が入って間もないのにトップ3に入ることができた。

自分の実力は未恐ろしいと感じた。

「おめでとう」

「おめでとう」

周りの声援は真珠の気分を高揚させた。

だがその姿を妬ましく思う人物が一人いた。

歯を食いしばり真珠の幸せを素直に喜べないのは、
先輩の従業員・瑠美であった。

自分は真珠よりもキャリアが長いのにも関わらず
順位が低いことが面白いはずなかった。

どうにかアイツのイメージを悪くさせる方法はないものか……………。

周囲に寵遇されていることをやっかまれ、こんな風に敵対視
されていようとは露知らず…。

「一真珠」

「…勇作！」

真珠が控え室から出てきたと同時に勇作は祝福の言葉をかけた。

「おめでとう、真珠。」

「ありがとう！」

「お祝いしないとね。今日はまだ仕事があるから」

「あ、そうなんだ。じゃあね」

「バイバイ」

真珠は勇作と廊下で分けられると鼻歌まじりで店内を出るほど今日はそれくらい上機嫌なのだ。

この喜びを家族と分かち合うことができないのが少し残念だが、大好きな勇作にお祝いしてもらえるならそれ以上のことがなかった。

その幸せに満ちた姿をずっと監視し続ける人物がいた。

「…………ギリッ」

……悔しそうに歯ぎしりする人物。

結果発表の時も一人、顔をゆがめていた瑠美である。

瑠美は、真珠は小倉に接待をしたから勝てたのだと勝手な推断を凶っていた。

瑠美は長い爪を噛み始めた。

…アイツを落とす方法…。

一翌日。

「一あ、誰か来た。は～い」

「俺が出ようか？」

「いや、あたしが出るよ。」

ある日の水曜日。

真昼間から行為に耽っていたとされる男女がいた。

女は薄着の上に上着をはおると、

玄関まで行ってインターホンから確認した。

しかし玄関の前に立ちつくしていたのは一

「あっ…！！」

「どした？」

男は何も気にせず腰が抜けたようにその場に座り込んだ

女に話しかけた。

警戒心のない男の方はパンツ一丁で

インターホンから外を確認した。

すると、そこには一

「お、お、小倉さん…！！」

「…よお。久しぶり」

「・・・小倉さん！！！」

「頭揃えて返してもらおうか。300万円」

「…………ツ！！！」

何故か外から開けられないはずのドアが開いた。

小倉は今にも床が抜けそうな部屋へ入り込んでくる。

「…お前ら…ちゃんと返済日まで返せねえと
どうなるか分かってるよな…？」

「……あっあっ……！」

追い詰められた男と女は逃げ場所を失った。

ガシツツ

「ひっ！」

「……こういうことになるんだよ、
おら立て」

「ご、ご、ごめんなさい〜〜〜！！許して下さいっ……」
髪のを驚掴みにされ恐怖のあまり、
涙で溢れ返った顔はあまりに不様だった。

「一ひっ！！」

「……来い」

小倉は女の髪のを引きずると、部屋の外へ出て行った。

「あ…ああ……。」

自分の彼女が目の前で引きずられている光景を目の前に
しているのにも関わらず足が竦み、何もできない情けない男。
自分の身だけは守るべく必死で逃げようとするが
男の首根っこをとらえられてしまった。

「お前も来い」

「ひいいいっ！！！」

鼻水と涙を垂らし、しまいには失禁した男を引きずり
小倉はどこかへ連れ去って行った…。

中傷

—真珠と坂巻の世話役の児玉が一番乗りで控え室に入った時だった。

「な、何これ・・・！！」

とんでもないものが、三人の目に飛び込んだ。

「—おい。これはどういうことだ」

「……………」

「誰がこんなことした」

チーフは低い声で従業員全員に問いかけた。

「仲間内でこんな陰湿なことやってるなんて…
外にばれたらどうなるか分かってんのか？」

チーフは数十枚の紙を机に叩きつける。

その紙に書かれていたのは、

【川上真珠は経営者や客に売春をしていた！】

という内容のもの。

当の真珠は根も葉もない情報を流され、
精神的に追い詰められ憔悴しきっていた。

「…大丈夫？」

「あ、ありがとうございます…」

「真珠ちゃん、気にしないで」

仲間からの気遣いの言葉は温情がこもっていたものの、
それだけでは真珠の心についた傷が癒えることはなかった…。

「—どうした。何があったんだ」

「あ、小倉さん…」

勇作が控え室に入ってきたと同時に

チーフは、デマを流されたもう一人の被害者・小倉に

紙を見せた。

「見てください、これ。

経営者…小倉さんのことも書かれてるんです…」

根も葉もない噂であったが勇作は何の動揺もせず

冷静な判断を真珠に下した。

「お前、もう今日帰れ。」

「え・・・？」

「俺が送っていくから。今日は休んでろ」

—今日はもう何もするなどのことだった。

こんな気分では仕事をしてきつと身が入らないと

小倉は判断した。

「犯人はこちらで見つけておきますから」

「お、お願いします…」

チーフも全力で犯人を捜すと、落ち込んだ真珠に約束してくれた。

そんな二人の言葉に甘え、真珠は肩を落とし、引き上げることと

なった…。

「……………」ふっ…。

瑠美はトボトボと背中を落として帰る真珠の姿を見て心の中で嘲った。

自分の思い通りにいった何もかもに…。

「……………」

—どう、いじめてやろうか…。

しかしその時彼女は一度の過ちで全てを狂わすことになるなどと、思いもせず…。

目撃

「—ここか…。」

バーテンとして働く男子大学生、

音羽仁は事務所を見上げていた。

建物の更に上には星が光り輝く。

あのバーの経営者は良い仕事を教えてくれるのだという。

連絡をして、時間も決めておいたのだが遅れては少し失礼なので

30分早めに来てしまった。

入口の前で立ち往生しているのもそろそろ飽きたので、

事務所に足を踏み入れることにした。

「一…入れ。」

「…なんであたし何だよツツツ！！！」

「ぐだぐだ言わずにいいから入れっっ！！！」

「ぎゃあっ！！！」

思い切り尻を蹴飛ばされる。

女は、勢いよく地面に手をついた。

「…お前がやったんだろ」

「何がだよっ！！！」

「お前が川上真珠の誹謗中傷を流したんだろ」

「ちげーよ！！そんなことしてねーし！濡れ衣着せんな！」

「お前小倉さんになんて口聞いてんだ！！！」

女は小倉に偉そうな口を聞くたび

自分の隣にいる脇にいる二人の内、腕っ節のいい大柄な

方に思い切り背中を殴られた。

「ぐあっ！！！」

「…ばれないとでも思ってたか？」

小倉は静かに瑠美に問いかけた。

「今の技術舐めんなよ。素人でも調べればパソコンの機種だのいつ作成しただの全部割り当てられるんだからな」

「…………ツッ！！」

そこまで捜査したと聞くと、瑠美は完全に言葉を失った。
しかし横にいる男に殴られても蹴られても瑠美は自分のしたことを認める気はなかった。

「…それくらいでやめとけ。後の話は俺が聞く。」

「小倉さん…」

「まあ、店で今後のこととか話し合おう」

さっきまで険しかった小倉の顔が急に天使のような顔になった。

「そろそろ来客が来るから、そのあとでいいか？」

「は、はい…」

もっと怒鳴り散らされるのかと思いきや、
これからのことを話し合おうだなんて言われて瑠美は拍子抜けした。

「……呆れた。」

瑠美と共に部屋を出て行った小倉の後ろ姿を見つめていた男は小声でそう呟いた。

「何考えてんでしょうね？小倉さん、あんな女に何の同情の余地もないのに…」

「…いいや、考えがあるんだよ。小倉さんには」

「え？」

もう一人のチンピラは小倉の思惑が分かっているかのように口角をあげ、呟いた。

「……………ツツ」

一な、何なんだ今のは……………。

とんでもないものを聞いてしまったのか…。

さっきまで小倉と従業員の女の会話を仁は盗み聞きしていた。

こんなことを知ってしまったなんてばれたら、

俺も危害を加えられるのか…？

その地獄絵図が目に浮かんだ。

でも、なんであんな怖そうな人がこんなところに……………。

…今日は仕事のことを聞くにならない。

第一聞ける雰囲気じゃない。

やめておこう。

「…………ツ」

—俺はその日、すんなり帰っていたら何も見ずにすんでいたのかも
しれない。俺はその女にどんな処分が下されるのか、何故か興味が
湧いてしまった。その経緯をドア越しから聞いていた。

「—…きちんと、代償を支払ってもらわなくちやなあ。

借金はお前の体で払ってもらうよ」

—その時、ドアの向こうから何かを取り出す音が聞こえた。

「ひっ…!」

「…………」

「お前には本当に、消えてもらうよ。この店からも、この世界
からもな」

—…それと同時に、俺の耳にはおぞましい音が飛び込んできた。

「ぎゃあああああ…ツ!!」

「…………ツ」

ギイツギイツ…ツ

「…………ツ!?!」

—何かが締め付けられている音。

その音はやがて小さくなり…。

「…………。」

…ダメだ…。

ダダダダダダッ…

一仁は走った。

とにかく遠くへ走った。

物見遊山のつもりが、まさかこんなことに発展してしまうなんて。

仁はがくがくと震える足を必死で地面に立たせ、逃げた。

—ジュっつ、ジュっ—。

「…ふう。」

数週間経つと、仁はいつも通りいちご牛乳を飲んでいて、

あのおぞましい記憶を脳は振り払ってくれたようで、

日を追うごとにそれは薄れていく一方だった。

いつもの大学にいつもの食堂。

いつになく騒がしいが、そんなのを

よそに仁は自分の携帯を弄り、暇を潰していた。

《今週のトピックス》

【〇〇市近辺で相次いで起こる、失踪事件。一連の事件の可能性あり？】

「…………ツ！」

画面の一番上に表示されている事件の見出しが目を引いた。

何故なら、〇〇市は仁の暮らしている場所に近かったからだ。

仁は興味本位で画面をタッチし、その事件概要を読んだ。

『ここ最近、相次いで起こる失踪事件。

これはただの失踪ではなくこの事件には、ある関連性があることが分かった。行方不明者は皆、失踪前多額の債務を負っていたことが発覚。最近ではあるナイトバーの女性従業員が行方不明になるという事件が起きた。しかし失踪届が提出されたのは今回が初めてではなく既に別件で20件以上に上る。

警察は関連性のある事件として捜査を進めている』

「……………ツ。」

一仁の呼吸が一旦止まった。

数週間前、事務所のドアから聞いたとんでもない音。

経営者に失礼だが、あの音は紐で何かを締め付けるような音だ。

数週間前、事務所にいた人が行方不明…。

もしかして、あれは…。

「マスター、いつもの」

「はいよ」

仁はカクテルを作りながら、周りの状況を観察していた。

この店で何か変わったことはないか、と…。

やはり、どこを見ても瑠美らしい人物は見当たらなかった。

仕事の後でウエイトレスの誰かに聞くつもりだ。

「はい、お待ち」

「お疲れ～」

「お疲れ様～」

仕事が終わり、みんなが控室から出てくる。

…さて、聞き込みと行くか。

仁はチェック柄のパーカーとジーパンに早々と着替えると、
帰り際のウエイトレスに片っ端から話しかけた。

「ねえねえ、君達今暇？」

「…あの…何か？」

何だか、ナンパをしているみたいになってしまったが

今はそんなこと気にしている暇はない。

調査に専念せねば。

仁は誤解されるの覚悟で瑠美のことについて尋ねた。

「ね、ねえ前、崎本瑠美さんて人ここに勤めてたよね…？」

「瑠美？ああ、そうだけど…。」

「やめちゃったの？」

「...やめたっていうか、やめさせられたんじゃない？」

「え？」

「あのさ、ここの男従業員はあんま知らないと思うんだけど

総選挙で最下位とかブービー取り続けると強制的に

やめさせられるんだよね...」

「瑠美、ブービーとか最下位普通にとってたもんね...」

「...…………。」

一初耳だった。

ここの女従業員の間で、総選挙で競わせお互いのモチベーションを

上げていることなど。

バーテンダーの間ではそんなことなく、皆が仲良かった。

「え、それで？それで？」

「瑠美、借金に首が回らなくなって夜逃げしたんじゃないかな」

「ねえ、凄い困ってたもんね。お金色んなところで借りてたし...」

でも仁には夜逃げしたというのを否定できるだけの自信が

あった。経営者の事務所にいたのは、崎本瑠美という

人物だ。

「ほ、他には知らないかな……」

「勇作～！帰ろうっっ」

「...帰ろうか」

控室から元気のいい女の甲高い声が聞こえてきた。

「あ、真珠ちゃんだ...」

「あのこ経営者とあんなガセネタ流されたのに

それでも一緒に居られるなんてすごいよ...」

と、呟いた。

そういえばあのこ、確か一

仁はあることを思い出した。

ちょうど数ヶ月前、あのこが経営者と一緒に店内に入ってきたのを

見た。

「ね、ねえ、真珠...さんて経営者と付き合ってるの？」

「さあ、知らない。直接聞いてみれば？」

「でもっ...」

「ていうか、あんた何なの？根掘り葉掘り聞いてきて...」

「あっ...す、すみません」

「...ったく、私達も忙しいんだから」

と言って、あまりしつこく聞いてしまったためか

二人の女の子は向こうを向いてしまった。

大きな証拠は掴めなかったものの、いくつか手がかりになるような

ものを掴めて気はする。

真珠…。経営者…。崎本瑠美…。

けど色んなことが頭を駆け巡りややこしくもなった。

もし…あの子が経営者と付き合っていたとしたら…危ない。

真珠…あの子にも伝えないと。

「一ねえ、ちょっといい？」

「……あんた、誰…？」

「君に話があるんだけど」

真珠は不機嫌そうな顔をした。

ほぼ初対面の男に話しかけられ警戒心を露にしていた。

予想通りの反応だったがロッカールームに鍵を閉める真珠の横に仁はへばりついた。

「一さ、30分だけでもいいんだ、話を聞いてくれ…」

「…。」

真珠は疲れているのにこんな男に帰り道着き回され大層迷惑だった。仁の方も、実際は臆面としており嫌がる人間を追い回すというのはかなり胸が痛んだ。

しかし耳を貸さない真珠相手でも、粘ってあれやこれや思いつく限りの質問をぶつけた。

「き、君って…どうしてこの店に？」

「…君、経営者と付き合ってるの？」

「僕がこんなことをいう資格はないけど、
あの人は危険だから今すぐ別れた方がいいよ。」

「ヤバいよ。あの人。」

「…はあ？」

「…」

「あんた何がしたいの？…そうやって言ってあんた私と
勇作の仲を引き裂こうとしてるでしょ。」

「ちがっ…僕は…」

「何が違うのよ。」

「うっとうしいから付きまとわないでよね！！！」

「……ツツ」

一真珠の気を害さずに勇作のことを明確に伝えるなど到底
できるはずがなかった。

相手は小倉を完全に信用しきっている。

完全なる部外者にそんなこと言われたら、憤怒するのは
当たり前だった。

仁は真珠に何も伝えることができなかった歯がゆさを
こらえるため拳を握りしめ、その場に立ちつくしたのだった。

脅かされる者たち

「一ふう。」

「店長～ここに段ボール置いといていいですか～？」

「ああ。そこでいいよ！」

—安藤博信は、青天の昼下がり清々しい汗を流していた。

ここは代々歴史のある精肉店だ。

三代目店長として店を切り盛りする博信は、

従業員からも愛される人格者であった。

「……………」

「ん？仕事、終わった？」

後を振り返ると、黒髪の美少女立っていた。

どうやら仕事が終わったようだ。

(Good job!) と最後に親指を立て、サインを送った。

少女は嬉しそうに会釈をした。

一安藤精肉店は他の精肉店とは違い、知覚障害、聴覚障害、知的障害から色んな障害を持った人も雇う良心的な職場だ。博信は金稼ぎよりも人に安心した職場を提供することを第一に考えていたためか他の店より赤字や借金が多かった。

「一店長、今日もこんなに売れ残りしました」

「やっぱり、不況のせいかなあ」

「僕らの売り込みが弱いんでしょうか」

しかし落ち込む従業員・和樹に博信は責めることなく優しくフォローした。

「そんなの気にすることないよ。

今はスーパーの方にお客取られちゃうし。明日も頑張ろうっ！」

「店長…。」

どんなに苦しくても笑顔を絶やすことはなかった。

「...ふう、また大赤字だ...」

一人になると電卓をたたきながら大きな溜息をついていた。

誰にもこんな自分を見られたくない。

肩を落として暗くなっている自分を...

そんな時だった。

「一あ、はい...。どうぞ」

「.....。」

博信は人の気配に気づき、慌てて帳簿を隠す。

「...」

「あ、理紗ちゃんありがとう」

さっき博信の後に立っていた少女、

理紗がお盆にお茶を乗せ、部屋の中に入ってきていたのだ。

「いつもありがとう」

「.....」

博信が微笑むと理紗も微笑んだ。

「いただきます」

「理紗ちゃんの入れてくれるお茶はいつも美味しいよ。

ありがとう」

「……………」

理紗は博信に会釈すると、お盆を下げ静かに部屋を後にした。

それと同時に博信は隠した帳簿を机に広げた。

—…危ない。危ない。

理紗ちゃんにこんなところ見られると心配かけちゃうよ。

だが博信は理紗への警戒もあった。

—理紗は滅多に他の人間に心を許すことなく、

とある理由で施設に出された子供だった。

サヴァン症候群の理紗は精神の方に少し病気があり、

今でも他の従業員には心を許していない。

非常に難しい病気だ。

だが博信には心を許しているのか笑顔を見せ

その表情の中にはどこか恋心さえも覗わせる感じだった。

博信は理紗を誰よりも理解していたため、

理紗の前で暗い自分を見せることをしなかった。

一翌日。

「—そこにお掛け下さい」

今日は博信の元へとある客訪れた。

理紗は来客の前に温かいお茶の入った湯呑を置いた。

「ありがとう」

「……………」

「理紗ちゃん、下がっていいよ」

博信に促されると、

少し遠慮がちに会釈をすると理紗は部屋を退去した。

「—…安藤さん」

「…はい」

「…経営の方、どうですか？」

「ああ、はい。

まあなんとか…。でも赤字続きで…」

早速本題に入る。

それも金銭的な話だった為、両者ともに苦々しい顔をした。

その空気の重みは肌でさえも感じ取ることができた。

「…安藤さん。営業方針、お変えになったらどうですか？」

「え…？」

「こっちもね、慈善でやってるんじゃないんですよ。生活かかってますからね」

「…そ、それは承知してます…」

博信の声は小さくなった。

「…もう、そんな正直な商売してたらね

いつまで経っても金返せません。

経費を少なくするためにやっぱりココを使わないと。ココを」

こめかみをツンツンとつついた。

その動作から頭を柔軟に使って、金を稼げという

意味を示した。

そこまでは博信も理解することができた。

しかし、問題はここからだった。

博信が首肯しかねるような意見が小倉の口から飛び出したのだ。

「…ちょっと位賞味期限切れてるもの使ったって

誰にもばれませんで。勝ち残ってる店はみんなそうしてますよ。」

「…そ、そんなことして買った人が病気になったらどうするんですか!？」

「…今どきねえ、そんな自分の良心に従って生きてる人なんて

いませんよ。あなたの場合自分の立場を考えたらどうです？」

「…僕は祖父や父の教えをちゃんと守ってここまで

やってきたんです。

だからそんな考えがあったとしても絶対嫌です！」

博信は立ちあがるくらい憤怒した。

「あ、すいません。そんなに怒らないでください。
僕はただあなたに最悪のケースをお話ただけです。
安藤さんにはこのお店をずっと守ってほしい
あまりつい言ってしまったんです」

「……………」

「言葉が過ぎてすいません」

「…ぼ、僕も…ムキになってしまって…すいません」

博信は自分も少し感情的になりすぎたと小倉に謝罪すると、
席を立ちあがるほどの怒りが静まり、力が抜けた人形のように
座り込んだ。

「…あのお詫びとして何ですけど、
今日うちの店来てくれませんか？」

「え…？」

「その時酒飲みながら話しませんか？今後のこととか」
—博信は小倉に再び会おうと持ちかけられた。
時計を見るとそろそろ夕食の時間でもあったし、そこまで
時間はとれないので夕食後会う約束をした。

「—お疲れさま〜」

「お疲れ〜」

「あれ？店長、どうしたんです？今日どこか行くんですか？」

「ああ、ちよっとね。会う約束があるんだ。」

「珍しいですね〜、店長が外出なんて」

「今日は9時まで帰らないと思うから、戸締りしてね」

「分かりました」

従業員は店長を見送ると

「はあ〜っ、今日も終わった、終わった」

とのん気に背伸びをするだけだった。

「……………」

だが、その中に一人外出する博信の後ろ姿を見つめている人物がいた。

理紗には博信が心配でならなかった。

根拠もなく自分の元から離れていくような気がしていた。

「一失礼します」

「どうぞかけてください」

「…あ、失礼します」

博信は約束の時間に行くと静に小倉は既に待ちかまえていた。

座るのを確認すると、

勇作は戸棚に置いてある酒瓶を取り出し、コップに注いだ。

「どうぞ」

「あ、すみません……」

酒を差しだすと瓶を戸棚に戻し、新たな酒瓶の口を開けた。

「まあ、今のご時世不況ですし、何かと大変ですよ。
そういう債務者もあなただけじゃないですよ」
勇作はそそぎ終わるとキャップをしっかりと閉め、棚へ戻す。

「…まあでもそういう債務者の方々もねえ、
ちゃんと腹括って支払はきっちり色んな形で返してくれていますよ」

「色んな形・・・？」

「・・・どういう意味だか分かりますか？」

「うっ・・・」

「…大丈夫ですか？」

「え、ええ・・・」

博信に激しい眩暈が襲う。

この注がれた酒を一口飲んだだけで、激しい眠気に襲われる。

まだ話を10分もしていないうちに。

けれど、こんな状態では話にはならない・・・

そう判断した博信は席を立ちあがり、帰ろうとした。

「失礼しても…いいですか…？」

「調子が悪いのなら送って行きましょうか？僕の車で」

「いえ…電車があるので大丈夫です…」

「もうお帰りですか？」

「…あ、はい、すみません。

もう今ここでいられそうにないんで…」

「…失礼しました…」

博信はフラフラしながら部屋を出たと思いきや、急に走った。

…なんなんだ、あの殺気は。

小倉から感じるあの異様な空気は、骨の髄までしみ込んだ。

とにかく、とにかく早く出ないと…。

大した眩暈ではなかったが、あのままでは自分ほとんどない目に合わされる。そう感じて、咄嗟に部屋を飛び出した。

「…あ～あ、アイツも返せねえなら…」

「……はあつはあつ。」

博信は息せき切らしながら走った。

ああ、やっと駅の改札口まできた…。

もうここまでくれば…。

博信は身を隠すかのようにホームへ駆け込み電車が来るのを待った。

—しかし何者かの足音が忍び寄っていた。
それは博信のいる駅のホームの方へ足が伸びていく。
それに博信は気づかない。
不吉なことを暗示するかのように夜空は星一つない悪天候だった。

「…ふう」

—安心の溜息をつき、切符も手にして、
後来るのを10分待てば理紗とお茶が飲めるんだ。
ささやかな幸せを胸に電車の到着を待っていた。

「……………」

—向こう側の方から救いの光が差し込んできた。
やっと帰れる。やっと、自分の家へ。
逃げ切れたんだ…。

博信はホッと胸をなでおろし、電車に吸い寄せられた体は—

「…………っ！？」

突然の死

「一…まだ若かったのに…」

「事故…だったんでしょう…？」

「…店長…グスツグスツ…」

「どうして…」

「駅のホームから転落して死んじゃうなんて…」

一博信はあの後、駅のホームから転落し死亡した。

あの死は事故死として扱われた。

理由としては体内からはアルコール度数の最も高いとされる

ウォッカが検出され、他にも遺書らしきものも発見されなかった

為泥酔によるホームからの転落死…と警察は処理。

「…。」

「グスツ、グスツ…」

しかし、周りが泣いているのをよそに涙を流すことが

出来ない人物が一人いた。

「小早川理紗さんだね・・・？」

「…。」

「警察のものだが、事件の時のことを聞かせてくれないかな…？」

それは、あの事件当日も博信が心配でいてもたってもいられなかった

少女・理紗だった。

「一君はあの時歩道橋にいたね？」

何故...あんな時間に一人でいたのかな」

「……。」

理紗は刑事にペンと紙を差し出され、あの日のアリバイについて

尋ねられた。

手渡されたがそれらに触れようとしなない。

顔の表情があまりに強張っていた。

理紗があまりに怯えているようにも見えたのか、

刑事は質問を変えた。

「君の知ってることなんでも良いんだ、

だから絵でも文でもいいから教えてくれないかな...？」

そう刑事が一言つぶやくと、さっきまでペンにさえも

触れようとしなかった理紗の手がペンに伸び紙の上に何か意味ありげなものを

書き始めた。

「...？」

理紗は三人と歩道橋、ホーム、電車と思われるものを

色濃く書き、分かりやすい状況説明を絵だけで表現した。

それは、駅のホームで人が何者から突き落されたのを歩道橋の上からみている何とも奇妙な構図だった。

理紗はそれだけで終わらずまだ何か描いている。
刑事は理紗の鉛筆の鉛を転がすように紙に
こすりつける姿を見つめていた。

「—…もう書き終わったのかい？」

「…。」

補足として理紗が描いた人物の容貌は30代位の
黒い服を着ている男。

残念なことにマスクのせいで特定できなかったようだ。

「君……あの時、何か見たんだね…？」

刑事は理紗の絵から、他殺だと悟った。

浮かび上がり始めたもの

「—そういえば…」

理紗に取り調べをした刑事・米津は深夜部署で一人あることを思い出していた。

今から二カ月くらい前の出来事。

この界隈のナイトクラブで暴力団風の男たちが襲撃事件を起こしたのを思い出した。

殺害されたのは黒宮という若い男。

VIPルームに被害者がいたため、

誰も気づかず犯人らはまんまと逃走したが

その二日後に逮捕された。

犯人らは、暴力団の『松名組』の一員でありマークされていた存在であったが彼らを指揮したのは嫌疑をかけられた幹部ではなかった。

この襲撃事件の衷心的な人物である男は、

事情聴取の間、何度も何度も意味深なことを呟いてはそれ以上のことを質問しようものなら口を噤むだけだった。

『あの人の頼みだからな…』

『あの人』、『あの人』と曖昧な表現をするだけで

結局『あの人』のついての真相も語ろうとはしなかった。

そして、何の真実もその男から絞り出せないまま

留置所で静かに主犯格の男は自らの舌を噛み切って自殺…。

この事件は迷宮入りとして、処理されたのだがこの主犯の男の持ち物検査の時スーツの内ポケットから青色の宝石が出てきた。

(—これは何だ?)

と、刑事が赤西に聞いただけで何故かおどけた顔をしていた。

『やめろ…、見せるな…。来る…化け物…』

と、支離滅裂な文法で何かを訴えたその日、奴は留置所で自殺していた。看守が見つけた時には既に死んでいたという。

我々は、惜しいことをしたと感じた。

この男をもっと見張っておけば、事件の解決の糸口が見えたかもしれなかったのに、と。

でもこの男の行動を見た時、
なにかに『抑圧』されているかのように見えた。

この事件の背後に伏在する犯人に洗脳され、このラピスラズリの宝石を見たら自動的に自ら命を絶つように、そう設定されていたのだと。

—チツチツチツ…。

「—……………」

「…犬伏、お前が死んで6年も経つんだよなあ…」

『—犬伏!?どうした!?!』

『…米津…、俺もうダメかもしれない…』

米津は静かに黙祷を捧げた。仲間の犬伏はちょうど6年前の今日のこの時間、潜入調査で命を落とした。米津に静かなSOSを送りながら命ははかなく、消えていったことを…。自分もいつ、命を落とすかはわからない。けど、どんな事件でも立ち向かおうと決めたのだ。米津はそれを胸に今日も働く。

「そして、何より気がかりなのが……」

ここ最近で死亡している人が皆、多額の負債を背負っていたこと
だった。

まず、殺害された黒宮和成、今回亡くなった安藤博信、
今も尚行方不明のウエイトレス崎本瑠美。

いずれにしても、この3人はどこやかしの金融会社に手をだし
経営だの生活だの、借金返済だのいろんな目的で利用していた。

年齢も性別もみな、バラバラだが一つだけ一貫して共通している
部分を見つけた。それは、小倉金融業という金融会社に手を出しているということ
。ただ、小倉金融業は無茶な取り立てや違法な利息で金を貸していない。自殺する
ほど追い込まれるようなものでもないのだ。

「一体、どうなってるんだ……」

だからこそこの事件は全部不審点が多い。

それにこの金融業は、そんなに悪い評判は聞かない。

今のところ決定的な証拠は見当たらない。

犯人と特定できるものも、何も捜査線上には浮かび上がってこない。

何者かの犯行であればまるで私たち警察を嘲っているような犯行だ。

ただ一つ、見え隠れしているものといえばこの3人の男女の奇妙な
共通点だけである。

一早朝。

今日は土曜日であったが、翡翠は学校の用事がある為自転車を駐車場から出した時だった。

自宅から数m出た時、黒い車が自分の前を低速度で通りすぎた。

どこか見覚えのある車だったが

翡翠は気にせず自転車をこぎ続けていると自分の目の前でその車が止まった。そして車の窓がゆっくりと下がる。

「おはよう、翡翠ちゃん」

「…お、小倉さん…。」

一見覚えがある車だと思ったら、現れたのは翡翠が苦手とする小倉だった。最近、あまり姿を見ないからホッとしていたのに再びあの嫌なものでも見た時の感情が湧いてきたのだ。

あまり接触したくない為、理由をつけてその場から去ろうとした。

「あ、姉なら…もう学校に行きましたよ」

「知ってる。」

「……………」

「…君を俺の愛車に乗せてあげようかなって思ってさ」

「…え…そんな、悪いです…」

エンジンの止まった車を止め外へ移動すると、ドアに凭れかかり奇妙な笑顔で翡翠を熟視した。

その視線に翡翠は動揺し自転車のハンドルをより一層強く握りしめた。

「来てほしいところがあるんだ」

「…。」

翡翠は後ずさりした。何だか気味が悪かった。

何となく肌でこの男はとんでもないことをしようとしていることがわかった。

「…どうして逃げるの？」

「…ツツ」

小倉の目を見ていると睡眠術にかけられているかのようにおかしい感覚になる。体に動けと脳が指示しても動かない。男はジリジリと翡翠を精神的にも肉体的にも追いつめてきた。

「…おいでよ」

「…つつ」

「おいで？」

「一……………ん」

鉄二はその頃目覚まし時計のけたたましい音で目を覚ました。

「…もう7時か」

まだ半分起きていない体を起こし、居間へ向った。

「あ…」

居間に目をこすりながら入った鉄二を、とても心温まるものが待っていた。

【お父さんとお姉ちゃんへ
朝ご飯作っておくからチンして食べてね】

—それは、翡翠の置手紙。

翡翠は自分のご飯だけではなく他の家族の分まできちんと作り置きしてその上、メッセージまで残して家を出て行った。

「翡翠……」

—あの子は本当に優しい子だな。

鉄二は翡翠の懇切な心遣いが心に染みた。

俺はこの世に二人とない知己を得ていると思う。

まだ高校1年生だが、亡くなった母親・琥珀の役割までもを補ってくれている。

真珠はそんなのではないが家のムードメーカーでいつも周りを明るくしてくれている。

…それに引き換え俺はなんだ。

娘達を守るためだの、綺麗事ほざいて。

結局金儲けで頭がっぴいだっただけじゃないか。

今までの俺は虚栄を張ることで精いっぴいだった。

いつかは償う罪。償われなくてはならない罪。

これから逃げるのはそろそろやめにしよう。

真珠が小倉に人質に取られた位からだ。

こんな風に自分を客観視するようになったのは。

でもそういう考えを持ち合わせているのなら真珠を今助けに

いけと言う話になるだろう。

やはり、それは怖い。

全然、心の決心が少しもついていない。

それに、小倉は俺を脅すだけであって娘二人には何の危害も
加えられていないのだし。

自分だけなら耐えられると思っていたその矢先だった一。

「はいはい」

鉄二の思考回路を断絶するかのよう

目覚めし時計の次は電話がけたたましくなり始めた。

誰宛かさえもまともに見ず、携帯電話を耳にあてた。

「もしもし？」

『……………』

「…？」

電話口から車を運転しているような音が聞こえる。

無言電話が数秒続いた。

「…あのどちら…」

悪戯電話か間違い電話かと思い通話終了ボタンを押そうとしたら

相手は声を発した。

『お久しぶりですね、川上鉄二さん』

「小倉…？」

—電話をかけてきたのは何とあの男だった。

『…僕寂しかったんですよ？あなたに会えなくて』

「…なんだこんな朝早くに。…今度は何の用だ？」

白々しい嘘を並べ立て、また何か俺をひっかきまわそう

としているのだろう。今までの行動パターンからそう察しは

ついていたのだが今回だけは違った。

『…今ね、あなたの大切な翡翠ちゃんをいいところに連れて
行ってあげてるんです』

「えっ…？」

『聞きたいですか？声、聞かせてあげましょうか？』

小倉は少し電話口から離れ、「おいお前の父親だ。」

と言う声を受話器に飛ばした。

「……!？」

その声を聞いて、鉄二は急に不安を抱いた。

また心臓に悪い冗談でもこいているんだと思っていた。

しかしそのあと、電話口から翡翠の声が本当に聞こえてきた。

『お、お父さん…。た、助けて…』

「おっ、お前!!娘に何した!!」

『返してほしいけりや僕の居る場所を
探し出すことです』

「ちよっ、待てっ…」

小倉は鉄二の質問にまともに答えず、電話を切った。

翡翠の助けを呼ぶ声は、こうして儂く宙に消えた。

その後には間抜けな通話終了の音が響くだけだった。

「翡翠…。」

鉄二はその場へ倒れこむ。

一俺のせいで…、翡翠は、翡翠は…。

ついにあの男の食べ物にされてしまった…。

さっきまでの幸せはつかの間、大切な愛娘を奪った小倉への
復讐心が一気に芽生えた。

戦う時

—AM11:44:12

「—ただいま〜」

一方真珠は呑気に友達の家泊めてもらい

一日中話に花を咲かせいた。

家に今、渾沌が起こっていることは少しも知らずに

鉄二に軽い調子で話しかけた。

「お父さ〜ん、ごめんねえ。友達の家泊めてもらったの」

「…ああ、おかえり。真珠」

「どうしたの？そんな沈んで…」

「わっ！ちよっ…痛い」

「…いいか、真珠。これから父さんのいうことちゃんと聞け」

鉄二は真珠が帰ってきて早々、肩を掴んでこれからの行動に

ついて指示を出した。あまりに動揺しているせいか真珠に

痛いとの苦言も聞こえず力の加減が出来ない。

「誰が来ても絶対ドアを開けるな」

「え…待っ…」

「ちよっと行ってくる」

「行くってどこへ…」

鉄二は真珠の質問にまともに応えもせず、地響きを立て家を出た。

今から、あの憎き男の後を追うのだ。

「—おいっ！！開けろッッ！いるんだろっ！！
そこにっ！！隠れてないで出てこいよ！！」

「…どうしたんだろ、あの人…」

「さあ…」

「小倉ッッ！！翡翠をどこにやった！！！」

鉄二は勇作の事務所の戸を拳で叩き、奴の名前を呼び続けた。
道行く人は皆、鉄二を白い目を見たが
今はそんなことは構ってられなかった。
大切な娘を取り返すのに、自分の風体などどうでもいい。
半狂乱になり手が真っ赤になるくらい叩き、声も枯れそうになる
くらい叫んだときだった。

「……！？」

「小倉あっつ！！！」

—ここが小倉勇作の経営している事務所だ。
安藤博信の事件に疑問を持ち、捜査を続ける
刑事・米津は遂に小倉の所在地にこぎつけた。
捜査を進めていくうち、小倉金融業他、
安藤氏と最後にあったとされる人物であることも発覚したのだ。
当の本人はいるのか期待と不安を持ちながら
事務所へ続く螺旋階段を上った時だった。

「小倉アアアツツ！！！！」

「・・・！？」

獣のようなけたたましい声が聞こえた。

慌てて階段を駆け上ると—

「開けろおおお！！！！」

鉄二は拳だけでなく体全身で扉に激突し、無理やり扉を開けようとしていたためか頭から腕から脚から見える所全部から血が流れていた。

「やめなさい！！！」

「うわあああああ…ツツ！！！！離せッ！離せエッ！！！！」

鉄二は米津に後ろから抑えつけられるも、怒り狂う鉄二は暴れ続けた。

「どうしたんです！？」

「娘がっ…娘がっ…」

「え！？あなたの娘さんがどうしたんですか！？」

「小倉に…ツ誘拐されて…っ」

「小倉！？」

「翡翠が…翡翠が…ツツ」

「…私は警察の者です。話は車で聞きます。

とにかくここから一度離れましょう。ここには誰もいません」

「うっ…うっ…」

米津は泣きじゃくる鉄二を何とか説得し、螺旋階段から連れ出すことに成功した。

「一…川上さん、大丈夫ですか？」

「…はい。」

鉄二は30分経過した頃には漸く気が落ち着いたのか
受け答えは何とか出来る状態まで持ち直した。

「…私はあなたが小倉とどういう関係か知らないですが、
私もあなたと同じで小倉の存在を追ってたんです」

「え…？」

「最近この街で起きてる多額債務者連続変死事件、
あれは事故として警察では処理されてきました。
けど、この前それを覆す出来事があったんです」

「覆す…出来事？」

「ええ、あれは単体の事件ではなく全て繋がった
一つの事件だったということ。」

「小倉勇作…おそらく、ヤツが黒幕でしょう。
私はそう睨んでいます」

「米津さん…」

米津、この観察力と新しい視点を持った刑事との出会いで
暗闇で一人恐怖と闘い続けた鉄二の戦いに一つの光を
もたらしたのであった。

告白

「……お父さん、遅いなあ。もう午後の2時じゃん。」
真珠は非常事態が起きていることすら知らず、時間を
中々帰ってこない父を気にしていた。
外に出るな、と言われたらその反動で
つつい出たくなってしまう。
我慢できる許容範囲を超えそうになった時だった。

「あ、お父さんかな？」
誰かが帰ってきたような気配がした。
普段は帰ってきた家族の為にドアを開けない真珠も
今日だけは違っていた。

「お父さ…ただい…」
しかし、扉の向こうに立っていた人物は
真珠の待っていた人とは大違いでむしろ期待はずれの人物だった。

「……………何？」
「…真珠さん、君に話があって…」
「…………。」

—真珠が忌み嫌う人物、音羽仁だった。
数日前ストーカーのように付きまとわれてから、顔も
見たくない声も聞きたくなかった相手だったのに運悪くこの
男は家にまで訪問してきた。

「家まで来て一体何の用？」
「やっぱり…僕、君に伝えないと何かスツキリしない。
頼む…話だけでもいいから聞いてほしいんだ！！」
「うざいって言ってんのになんで来るの！？
帰ってよ！」
「頼む…頼むから！！」
「このっ…!!」

一でも、今日の仁は一味違った。

すぐには引き下がらなかった。

この前は怒鳴られてすぐに怯み、退散したが

今日はドアを閉めようとしてもその隙間に手を突っ込んで
こじ開けてこようとする。

「しつこいわね…！警察呼ぶわよ！？」

「呼びたけりゃ呼べばいい！」

と言って脅すが、仁は売り言葉に買い言葉で
食い下がってきた。

「…このっ…！」

二人で扉の前で押し問答していた時だった。

「おいっ！そこで何してるっ！…貴様、誰だ！？」

「お父さん助けて!!コイツが…」

仁はその声に慌てて後ろを振り向いた。

真珠は助けを求めたが、父は約束を破った娘にも憤怒した。

「ドアをあれだけ開けるなどいったのに！それより貴様…
小倉の一味か!？」

「ちっ、違います!!」

仁は鉄二に必死で経緯を説明した。

自分は小倉のことを伝えるためにここに来たと。

上手く話せず、四苦八苦しつつも全部言いきることができた。

「川上さんがご存じかどうかは分かりませんが真珠さんと
交際されてる小倉勇作という人物についてお話があつて…。」

「小倉…勇作！？君も知ってるんだな!？」

「は、はい…!」

「でも…君はどっちなんだ!？」

「え!？」

「…味方か!?!…敵か!?!」

そこまで仔細に話しても、錯乱状態にある鉄二には敵なのか味方なのか相手の態度から推察することは不可能だった。

しかし、米津は仁の目を見た時嘘をついているようには見えなかった。鉄二は暫く、彼に嫌疑をかけていたが米津のフォローもあり仁の疑いは徐々に晴れて行った。

鉄二は仁を敵のように捉えていた目が変わった。

そして、仁を不審者扱いしたことを深く謝罪した。

「…そ、そんな…頭を下げないで下さい…。」

押しかけてきた僕も十分が非があります。こちらこそ、

すいませんでした…」

一両者ともに自分のしたことの非を認めあった。

その場が落ち着いたころ、

鉄二の背後にへばりついて一連の流れを見ていた刑事は

遂に本題へと話を移した。

「一君、話を聞かせてくれないかな」

「え…？あなたは？」

「刑事の米津です。

話は川上さんあなたのご自宅でも結構ですか？」

「え、ええもちろん」

証言

今、川上家に刑事とバーテンダーという何とも奇妙な組み合わせが誕生した。

「お茶、いかがですか？」

「ああ、ありがとう。けど結構だよ」

真珠なりに気を回しても彼らは、話に夢中になりお茶を拒む。

今一つ、話が読めない真珠は何かしていなかったら退屈で仕方なかった。

仁や米津と名のる刑事の話静かに聞いていることしかできなかった。

「…音羽…仁くんと言ったね」

「…はい」

「君は…小倉とどういう関係なのかな」

しかし小倉の話題に入った途端、ぼんやりとしか入ってこなかった話が急に鮮明に入ってきた。

「…僕と小倉さんは経営者と小倉さんが経営する店の店員という関係でした。

それで僕がたまたま事務所を訪ねた時、聞いちゃったんです…」

仁はあの日、扉越しから聞いていた一部始終を全て話した。

まともな判断ができないくらい動揺をしていたこともあり、少々の話の脚色も考えられたがそれにしても現実味の話であった。

「一で…僕、怖くなって…その場から逃げて…」

「…君のいう崎本瑠美さんは、先日事故死したウエイトレスの女性と同一人物ってことになるね？」

「はい…」

「瑠美…!？」

「どうした、真珠」

「…る、瑠美が…どうかしたの…?」

「ど、どういうこと…?さっきから。
勇作がどうかしたの…?」

みんなして勇作が人殺しかもしれないだの物騒なことを
推測している。まだ勇作にたくさんの夢を抱いている真珠は
動揺した。

「真珠…」

「…勇作がそんなことッ…」

「真珠ちゃん。これは事実なんだ。
君の恋人…小倉勇作は、これまでに何人もの命を
奪ってきた可能性があるんだよ…」

「嘘…」

真珠は動揺が隠せなかった。

自分の彼氏がまさか多くの人から金をむしり取り
命までもを奪っていたなんて。

あんな素敵な笑顔で、自分にふるまってくれる人が?
自分に優しい人が?不良から私を守ってくれた人が?
信じられなかった。

「…真珠、もうひとつ動揺しないで聞いてほしいんだ。
実はな、父さんも…小倉に脅されてた」

「え……………」

「…けど、お父さんは仕方ないよ。
何故ならお父さんは罪人なんだ」

「罪人…?何それ…」

一鉄二は隠し通せることではないと感じ、刑事である米津、
さっきまでほぼ無関係だった仁の前で洗いざらい話した。

「…それで…いうこと聞かなきゃ真珠と翡翠に酷い
目に合わすぞってずっと脅されてて…」

「…お父さん…」

「…ごめんな…。父さん二人のこと守ってやれなくて…
ダメな父親だよな」

「…そんなことないツ…お父さんは私達のたった一人の
かけがえのないお父さんだよ」

「真珠…」

「お母さんがいなくて寂しかった時も、お父さんがいてくれた
からなんだよ?」

二人の親子愛に仁、米津は胸に込み上げてくる熱いものを感じた。
娘は父の犯した罪が許されざるものであったとしても、
たとえそれが世間が許さないものだったとしても、
親子の愛だけは全てを許せた。
悲惨な状況であったが、二人はそれでも感動できた。

「…そのためにも早く翡翠さんを助けに行きましょう。
捜索隊は今から呼びます、
一緒に僕らと翡翠さんを助け出しましょう」

親子関係が固い絆で結びつけられたのを確認すると、
米津は早速立ちあがり捜索体勢に入った。

「…その前に…」

鉄二はあることをしてから、戦いに挑む体勢を作ろうとした。
それはここにいる全員を巻き込んでの行動だった。

「—……………」

「……………」

鉄二、真珠、仁、米津は手を合わせ黙禱を捧げた。
遺影の中でこちらに微笑む二人の娘の母・琥珀。

「…琥珀、どうか翡翠をお守りください。」
ただ娘が助かればそれでいい。もう何も失いものなど、
今の鉄二にはなかった。

恐怖

「きゃあっ！！！」

翡翠は暗い車内から、外へ放りだされるなり

固い地面に叩きつけられた。

翡翠の繊細な手の皮膚は、尖った石に負け真っ赤になってしまった。

「…立て」

「……ッ」

こんなか弱い女子校生を乱暴に扱っているのに、この男は表情一つ変えず蹠踉と足取りの翡翠を車から叩きだし、旅館の入り口まで歩かせた。

「……ッ」

一見したところ、普通の山荘だったが人気がなく、とてつもなく辺鄙な場所だ。

一私はこれから一体どんな目にあわされるのだろう。

翡翠は恐怖や絶望の中、何度も足が竦みそうになっても歩き続けた。

言うことを聞かないと、何をされるか分からないからだ。

「一きゃっ！」

「歩け」

「…っ！」

手を思い切り引っ張られながら目的の部屋まで連れて行かされた。

廊下を歩いている最中、あの事を思い出した。

旅館でこの男が、女と如何わしいことをしていたことを。

あれ以来旅館を見るとそういう風にしか思えなくなってしまった。

しかし、例えどれだけ嫌であっても何があろうともこの男の

言うことを聞かなければもっと酷い仕打ちをされるかもしれない。

ただ、酷い仕打ちを受けたくないという一心でこの男に従順に
ふるまっていた。

「一おい、コイツ、コイツ。」

「あ～？お前遅かったじゃねえか～？」

「お前丁度欲しかったろ？相手がさ」

「おお、サンキュ。いくらだ？」

「五万。上玉だからな、丁重に扱えよな。時間来たら電話するから。それまで楽しんでろ。」

「おお」

「…………っ！」

一翡翠は一瞬で気付いた。自分は、今売春をさせられると。

この会話は何度も刑事ドラマの一場面によく見てきた。

中には、スーパーヒーローのような人が運よく助けに来てくれるパターンもあれば玩具のように弄ばれた拳句、命を奪われるという最悪なパターンもある。

自分はどっちなのだろうと考えた。

「あっ…！」

小倉は和室の戸を閉めるとどこかへ姿をくらました。

そして如何わしい行為を期待する中年親父だけがこの辺鄙な場所に位置する旅館の一部屋にとり残されてしまった。中年親父は小倉が完全に遠ざかるのを確認すると、翡翠に手を伸ばした。

「さあ～これから、おじさんといいことしようねえ」

「…っ！」

酒を飲んでいたのか、においが非常にきつい。

厭らしそうなことをしようと目論んでいるのが目を見ただけで分かった。

「脱いで？」

「～～っ！！」

「脱がないならおじさんが脱がせてあげる～」

一手が翡翠の制服のボタンの方に伸びる。

絶対貞操を守って家に戻りたい。

翡翠はただその一心でテーブルの上にあるものを親父にぶつけはじめた。

「わっ！痛いつ、痛い」

「・・・・っ！！」

翡翠は生きる為に容赦なく部屋にあるものを手当たりしだいにぶつけた。

だが、その親父はやられっ放しで終るような親父ではなかった。

「おい、姉ちゃんやってくれるじゃねえか」

翡翠の抵抗は、やがて挑発に変わり男の目は徐々に常軌を逸脱し始めた。

「だったらこっちも容赦しねえからな！！」

「いやああああ！！！」

男は翡翠を捕まえようと狭い和室の中で追いかけてまわした。和室に置かれた小さな机を隔てて恐怖の鬼ごっこが始まってしまった。鬼に捕まれば、翡翠は鬼の食べ物にされてしまう。逃げ切れば、生き残ることができる。なので、この勝負は負けてなんかいらなかった。

「やめてください！何もしないでください！！！！」

「こっちはなあ、金払ってんだよ！！」

それなりの接待してもらわねえと困るんだ！！！」

翡翠は何度も何度も親父に捕まりそうになった。でも根性と気合いでそれを寸でかわした。しかし親父は翡翠の体力は限界寸前まで追い詰められてくる。10分経つ頃には、ほとんどの常備していた体力も奪われていた。

「…………っ！！」

「もうそろそろ観念したらどうだ??」

でも観念するなんてそんなわけいかない。無傷のまま、絶対父と姉の元に帰ることが彼女の切実な願いだった。完全に追い詰められた彼女には最後の切り札を使うしかなかった。

「…うわああああああああああ！！！！」

「っ！？」

「うぎゃああっ…！！！」

一鈍い音とともに男の低い叫び声が部屋中に轟いた。

「一グスツ…グスツ…」

声を押し殺し、部屋の隅で泣く翡翠。

目の前には、テレビで頭を殴った男が目を開けたまま、
気絶している。

流れる血はどんどん色に変色し、生々しさを増してゆく。

「…っつ」

翡翠の視界は徐々に薄れ始めた。

受け入れがたい現実と、緊張や不安に見舞われ過ぎたせいか
異常なほどストレスがかかり、苦しき昏迷が彼女を襲う。

そして、彼女の脳裏にはこの言葉が浮かんでいた。

—自分は殺人犯となってしまうのだろうか。

大好きな父や姉にはもう会えないのだろうか。

そんな恐怖や不安の中、翡翠は畳に体を寄り添うように眠った。

—午後7時29分44秒

「…。」

翡翠が監禁されてから、約7時間30分経った。

鉄二と真珠、仁は米津からの連絡を待ち続けていた。

「……ツツ」

当の鉄二はとっくに痺れを切らしていた。

居場所が分かれば自分はすぐにでも飛きたいという思いが
我慢が限界に達しそうになった、その時だった。

「はいっ！」

『鉄二さんですか！？翡翠さんの居場所が分かりました！』

「ひ、翡翠はどこにいるんですか！？」

『山荘です！』

—翡翠がいると思われるのはとある山荘。
捜索隊は今そこへ向かっている最中なのだという。
鉄二は米津にそこへ連れていくように頼んだ後
真珠と仁に家で待機するよう伝令した。

「…父さんがその山荘に行く。
真珠、音羽君はここで待ってなさい」
「…分かった」

先程まで家に待機することすら満足にできない真珠だったが、
事情が分かると見違える程物分かりがよくなっていた。
家族の団結力は、翡翠の誘拐により生まれたと言っても
過言ではなかった。

＊救出＊

「—いらっしや…きやあっ！！」

「突入だ！」

捜索隊は大きな地響きを立てて翡翠のいる部屋を探した。

「きやあっ！！」

隊員は一つ一つの部屋を片っ端から開けて行った。

開けた部屋の中に情事真っ最中の男女もいたが

お構いなく翡翠の部屋を辿っていた。

「あんた達何よッ！！」

「警察だ！お前ら売春防止法違反で現行犯逮捕する！」

そこにいた客、このような行為が行われていたことを黙許し

続けてきた従業員、女将も全員現行犯逮捕され警察に連行された。

「行方不明者、無事発見しました！」

「一人は頭を鈍器のような固いもので殴られ、
出血多量でショック状態…もう一人は意識を失ってます！」

「今すぐ救急車を！」

「はいっ！」

刑事たちは旅館の従業員達や女将、客を皆取り押さえ現行犯逮捕

した上、翡翠を無事発見し保護しようとした時だった。

「翡翠っ！！！」

「うわっ！！」

「関係者以外、立ち入り禁止ですよ!!あなた!!」

— 刑事を押しつけ翡翠に駆け寄った人物がいた。

「翡翠…翡翠…」と、名前を連呼し続ける。

眠る翡翠の体を固く抱きしめたのは鉄二。娘への募った思いが爆発した瞬間、刑事の制止も聞かず乗り込んだ。

理性というものがほぼ失われている鉄二をあまり刺激せぬように捜索隊は慎重に誘導した。

「翡翠は…この子は生きてるんですか!？」

「その子は無事です!だから落ち着いてください!

さあ、こちらへ!!」

「私は…この子の…父親なんです!!」

「娘さんは無事です。ただ一緒にいた男が意識不明の重体で…」

「…男!？」

— 鉄二の脳裏にはあの男の存在が頭をよぎった。

しかし、あの男が一人の少女にやれるような奴には見えなかった。確認の意味もあり、鉄二は警察に男の存在について尋ねた。

「男って…いくつくらいですか!？」

「50過ぎくらいの…」

「50過ぎ…」

確かに誘拐したのは小倉だ。

意識不明重体が、別の男だということはあの男はつまり翡翠を斡旋の目的で!？」

「刑事さん!!」

「わっ!次は何なんですか!？」

「小倉を…小倉勇作を逮捕してください！！！」

「は？」

「アイツなんです！！

私を脅迫して翡翠をこんな目に合わせたのも…」

「落ち着いてください！！話は署で聞きますから！！」

「…っっ！！」

「一……。」

「…お父さん」

「川上さん」

翡翠は無事救急車で病院に運ばれた。

精神的なショックで今は眠っているだけらしい。

白い肌の頬が少し桃色になっている普段通りの翡翠を見て日常を感じる事ができた。

「…二人はもう帰りなさい。明日、大学もあるだろうし」

「…あ、はい。失礼します」

「…お父さん、また来るから…」

翡翠の安否を確認すると、

真珠と仁は前かがみで椅子に座る鉄二の背中を見送りながら病室を出た。

「仁。」

「…ん？」

「…あの…今まで本当に酷いこといたりしてごめんね…」

「…真珠」

「本当に感謝してる…」

「…ううん。俺だってもう少しでアイツと同じになったた。

知ってるのにそのこと黙り続けなきゃいけないとこだったし…。」

一仁に真珠は、今までの無礼な行為を謝罪した。

その態度に仁も、自分の不器用さのせいで招いた数々の問題行為を謝ると二人は完全に和睦を結んだのだった。

「…俺、まだやらなきゃいけないことがあるみたいなんだ」

「え？」

「…警察は翡翠ちゃんに無理やり売春を強要した親父の意識が戻る次第アイツを逮捕するらしい。でも、小倉に逮捕令状が届くかは分からない」

しかし、安らぎもつかの間。仁には、真珠に苦しい内実を告げることが待っていた。

「アイツは上手くあの手この手で
法の網目を潜り抜けてやってきたから。」

「警察が何もやらないなら、俺が証拠を掴んでやる…」
仁の危険思想に真珠は不安を覚えながらも、
真実を掴みたいと思う気持ちは一緒だった。

「…一緒に掴もう？一人じゃ無理でしょ」
「き、君も着いてくる気…？」
まさかそんなつもりで言ったのではないから、
仁は動揺の色を見せた。

「当たり前でしょ。
妹をあんな惨い目に合わされたのに
何もしないでいられるわけじゃないでしょ」

「…よし、分かった。計画は後で話す。一緒に行かないか」
「…ええ」

* 直接対決 *

一翌日、午後7時42分。

「…あれが経営者の事務所だ」

「…あの二階が…」

真珠と仁は小倉の事務所を見つめた。

電気がついている。おそらくいるのだろう。

「さあ、行こう」

「……」

「真珠？」

しかし、真珠は動こうとしなかった。

仁は何となく予測はついていた。

まだ全て知ることへの決心がついていないのだろう。

そんな真珠を配慮して、仁だけが話をするとことにした。

「一あ、夜分にすいません。音羽ですが。僕、
小倉さんとお仕事のことでお話がありまして。
お時間少しだけ頂けないでしょうか？」

「……」

「いえ、本当にお時間とらせませんので。お願いします、
急用なんです」

「あ…本当ですか？ありがとうございます、すぐに伺います」

「…大丈夫だったの？」

「ああ。30分くらいなら時間をくれるって」

このチャンスを逃すまい、と二人は顔を引き締めた。

「一どうぞ」

「失礼します」

「…そこにお掛けください」

「何か飲み物、だしますね。」

一仁は、無事事務所に入ることに成功した。

小倉は飲み物を出そうと、部屋を抜け仁一人になった時
これは絶好のチャンスだと思った。

「真珠。もう来ていいよ」

と、この事務所のトイレに忍び込んでいる真珠の携帯に
連絡を入れ、部屋のクローゼットに隠れるように言った。

「…すぐに終わるから」

「分かった」

真珠をクローゼットに隠した後、室内を見渡した。

何の変哲もないシンプルなデザインのデスクや本棚だったが
おかしいところはないかと、欠点を探した。

ここで、瑠美は姿を消したのだから絶対どこかにはいるはずだ。

緊張のあまり、隅々まで行き届いていなかった神経を集中させる。

「ピラニア…?」

一するとそんな時目に入ったのは獰猛そうなピラニアの水槽。

あれだけ特徴的なものであるにも関わらず、部屋の
目立たない所に置かれていたせい何か何も気付かなかった。

仁は不思議とピラニアの水槽の方に吸い寄せられた。

「一うわっ!」

指を近づけると、噂通りピラニアはその鋭利な歯と
強靱な顎で肉を食いちぎろうとしてきた。

交わすのが少し遅かったら自分の指はどうなっていたのだろうと、考えるのも嫌になるような妄想をして気分が悪くなった。

そんな時、あるものが目に入る。

「指輪…?」

水槽の中に指輪のようなものが煌めいているのを発見した。

「なんで、こんなところに…」

仁はピラニアの水槽の横にある網を使って、指輪を取り出した。それは女性物のルビーの指輪だった。濡れた指輪を凝視していると、扉の開く音がした。

「…すいません、何がいか悩んでたら時間が過ぎちゃいました!」

「……………っ!」

—ピラニアの水槽を調べていると、飲み物を運んできた小倉が部屋に入ってきた。仁は拾った指輪を慌てて隠した。

「どうかなさいました?」

「い、いや〜…、小倉さんてお魚に興味があるんですね」

「そうなんですよ〜、俺特にピラニアとか好きなんですよ」

「へえ…。」

小倉は、仁の挙動不審な動きに気づいたようだった。でもそれでは不都合な為、小倉の魚の事について触れ、話題を誤魔化した。

小倉はテーブルにお茶を置くと、仁を席に座らせた。

「一で、話というのは?」

「あ、…はい」

—仁はこの話題に触れると、自分もピラニアの餌にされて生きては帰ってこれないかもしれない。

けれど、それを恐れては何も始まらなかった。

自分の義侠心だけを頼りに、何度も喉の辺りで詰まりそうになる言葉を絞り出す。

「あの…、小倉さん。これです…」

「…?」

「この指輪…」

「……。」

さっきポケットに隠した指輪を取り出した。

小倉は急に無表情になり、何も喋らなくなった。

事件の真髄に迫る部分である為なのか、苦渋の表情を浮かべているようにも見えた。

「ピラニアの…水槽の中に落ちてました」

「……」

「何で…ピラニアの水槽の中に指輪なんか落ちてたんですか?」

「さあ…何ででしょうね…、飼育係が落として行ったんでしょうかね…。」

しかし小倉は動揺する様子もなく、嘯いた。
ただでさえ人の扱いが慣れない仁には至難の業だった。
しかもこの男から真相をあぶりだすと言うことは、
警察が尋問をしようとも無理なことかもしれない。
けど、そんなことで諦めている場合ではない。
仁は不毛なことであっても話を続けた。

「一崎本瑠美さんと安藤さんの死ぬ直前にあったのもあなた
ですよ?川上さんに翡翠ちゃんを誘拐した脅迫電話をかけた
のもあなたなんでしょう!」

「……さあ。」

「……ッ」

仁は実否を糺しているのにも関わらず、まだ小倉は
自分のしてきたことを認めようとせず惚けた。
けれど、仁にはまだ重要な言葉が残されていた。

「これ、警察に提出すればすぐに特定できるでしょうね。
それに…川上さんの電話履歴を見たら、誰から電話がかかって
来たかさえも分かるはずですし」

「……。」

「だからお願いします、全部洗いざらい警察に話して下さい。
今、あの売春事件のことを話せるのも他の事件を話せるのも
あなただけなんです。あなたしかいないんです!」

「……。」

「それにあなたは、本当はそんなこと出来るような人じゃない…。
絶対そうだ。仕事のない人に提供する人がそんなことできると
思えない…」

「…………ツ！」

「……」

—小倉はうつむき、肩を落とした。

仁は自分の言葉により良心の呵責に苛まれ、肩を震わすくらい
泣いているかに思えた。

「…うっうっ…ツツ」

「小倉さん、一緒に警察へ行きま…」

「…ツツ…くっ…っくくくっ…」

「!？」

しかし小倉の泣き声は邪悪な笑い声のようなものへと変わり、
それは大爆笑へ変わった。

「ははははははははは！！」

「…！？」

「お前、馬鹿だなあ。

俺がそんなのでビビるとでも思ったのか？

自首なんてしねーよ」

「あ、あんた…。自分のしたこと認めるんだな!？」

「さあな。それは知らねえ。

…だがな、俺は仮に自分やったことだったとしても

絶対自首なんてしねえ。そんな馬鹿どこにいんだよ!」

「…あんた…なんてやつなんだっ！！たくさんの人を殺めることを
何も思わないのか!？」

「殺めたあ？…そんなのいつ見たんだよ。それに、そんなもん
警察に持って行った所でお前なんか相手にされねーよ!」

「お前…っ!」

「何だよ、お前やんのか?喧嘩売ってんのか!?!」

あまりの怒りに仁は立ち上がると小倉も立ちあがる。

仁の顔の近くまで顔をよせ、挑発を始めた。

その一触即発の空気は、クローゼットに隠れている真珠にさえ鮮明に聞こえてきた。

「うわっ!!!」

「…やめろォっ!!!」

「……っ!?!」

「…お前の馬鹿は死ぬまで治らねえだろうなあ」

仁は小倉に馬乗りのまま目の前まで包丁を突き付けられた。

刃の先端は、目の前まで近づいていた。

このままでは、真実を得る前に死んでしまう。

亡くなった人々の無念を晴らす事もできない。

その正義感とは裏腹に、不利な状況の仁は悔しくてたまらなかった。

「…お前は、ここで死んでもらうよ。」

「……っ!」

一クローゼットから勇作と仁のやり取りを覗いていた真珠は、仁に命の危機を感じた。

隠れている、と言われたがまたもあの時の父との約束のように破りそうになる。またあの時と同じように怒られるかもしれない。

「くっ…!」

仁が、持っていた指輪を手放す。

せっかく掴んだ証拠品が。

けれど仁の命がますます危ないと感じた真珠は、約束よりも命を助けることを優先してクローゼットから飛び出した。

「…真珠っ!？」

「っ!!」

「…!？」

小倉は一瞬驚いたような顔を見せた。

まさか部屋のクローゼットに真珠が待機していたとは。

それは用意周到な小倉でさえも想定外の出来事だった。

「早くっ！これを持って逃げて！！」

「はいっ!」

並段では出せることのなかった真珠の常軌を逸した兇猛な勇気がその時めざめた。

床に転がった指輪を真珠が拾ったのを確認すると、

咄嗟の判断でそのまま逃げるように指示した。

「うわあっっ！」

自分の方に注意をひかせている間に真珠を逃がした為、

不覚にも傷を負った腕から流れた赤い血が服を滲ませた。

揉み合った際に小倉のナイフの先端が仁の腕を傷つけたのだ。

「……っ」

「……ツツ！！」

「僕を…」

「…。」

「僕を甘く、見ないでください!!」

「ツ!!」

一仁は叫びそうになるほど痛かったが、それを必死で耐え、力を振り絞って包丁で攻撃してこようとする小倉の腹を思い切り蹴り上げた。身動きが取れない小倉の隙をつくど、慌てて部屋を出て真珠の後を追った。

「一はあはあっはあっ…」

その頃、真珠は息せき切らしながら仁に言われた隠れ場所に向っていた。

一仁…仁、あなたは無事なの…?

真珠は全力疾走中も、仁への憂慮に堪えなかった。

やはり一番気がかりなのは仁の安否。

数分前のやり取りが懐かしかったほどだ。

『一いいか、真珠。』

何かあったらお前は逃げてくれ。』

『どうして…?』

『証拠はないが、アイツはひよっとしたら何人もの人の命を奪った殺人鬼かもしれない』

『でも私一人だけ…?仁は?』

『俺は絶対行くから』

『…わ、分かった。で、逃げるのは…』

橋を渡った港にある工場ね?』

『ああ。』

「一……………」

一逃げ場所を分かるように地図を広げて場所を示してくれていた。

その時、地図を持っている仁の手に触れた。

あの手の温かみは生きてる証拠って感じた。

死んでいたら、地図を持つことさえも温かささえ感じられなくなるんだ。もう二度と会えなくなるかもしれないと言っていた仁の手にまた触れることはできるのか。

「…はあっ、はあっ…………あ、タクシー！」

真珠はタクシーに大きく手を掲げた。

するとタクシーの運転手はピタッと止まり、

ドアを開けてくれた。

「一〇〇工場…までお願いします！」

「お嬢ちゃん、こんな時間に一人でかい？」

「いいんです、お願いします！」

運転手は不思議そうな顔をしたものの、素直に車を出してくれた。
仁に約束の場所で会いたいその願いが通じたかのようなスムーズさ
で車は夜の街を走り始めた。

* 廃工場 *

「一はあつ…はあつ…」

一方、仁はさっきの負傷が逃げるのを手間取らせるのに大きく影響していた。

真っ赤に染まった服に覆われた腕を押さえながら、人の行きかう殷賑な街の中を出奔していた。運動部に入って鍛えてはいるも、やっぱりケガを負うと思うように体力が続かなかった。

「……………あ！」

一そんな時、タクシーを一台見かけた。

負傷した腕の方を隠して手を挙げた。ピッタリ止まったタクシーに乗り込むと「〇〇工場まで！」行き先を伝え、真珠の待つ場所へ向かった。

「一……。」

一方、真珠は証拠品を持ったままガチガチ震えていた。仁が来るのが先か。…小倉が来るのが先か。それだけでも、自分の運命は大きく変わってしまう。

「……………」

…けれどそんな感情の中で、真珠は勇作のことをどこかで信じたいと思う気持ちがあった。

自分は騙されていたのか？

出来ればそんなこと思いたくない。

でもお父さんも翡翠も…皆勇作に酷い目に合わされたことは真実だ。

翡翠にした仕打ちを許せるわけじゃない。

もし、それが本当なら許すことなんてできない。

けど、それでもちゃんと…勇作と話し合いたい。

真珠は強く、彼との和解を切望した。

人は誰かの温もりで変われると信じたかった。

「まっ…真珠」

「ひ、仁！」

「はあはあっ…」

「どうしたの！？その腕…っ」

「シッ！」

「あ、ごめん！」

「もっと奥の方へ隠れよう！」

仁は、腕から痛々しそうな血を流しながらも痛みなど微塵も感じさせぬ、冷静な対応と指示だった。

「—……」

「あ、米津さん？…小倉が戻ってきました。」

「多分奴は〇〇工場の港に来るでしょう。

今、僕らはそこにいます。あ、はい。はい分かりました。

お願いします！」

「…米津さん達が来てくれるんだってよ」

「よかつ…」

「ッ！？」

米津が来てくれる一、そんな安心に見舞われたその瞬間。

何か鉄の棒のようなものを引きずるような音がした。

「……………っ！？」

ガガガガッ…ゴッっ…ザザッ…ガツツ…

仁はそっと物陰から確認した。

すると、そこには

体を右に傾かせながら重たそうな長い鉄の棒を

引きずっている小倉が近づいていた。

今、ここにいることがバレれば、完璧に自分たちは死ぬ。

「……………」

「…キヤ…」

悲鳴をあげかけた真珠の口をふさぐと、
仁は自分の体を抱き寄せて小倉が通りすぎるまで待った。

「……っ」

ーピリリリリリリリリリッ

「っ！！」

その時、運悪く

仁のマナーモードにし忘れた携帯が鳴り響き始めた。

慌てて携帯の音を止めたがその音はかなり大きな音量だった。

「ツッ！！」

「ー…！」

ギギギッガガガッ…

鉄がこすれるような音は

仁や真珠の方に向いて大きくなっていく。

「…っ！」

ちよつとずつちよつとずつこちらに近づいてくる。

追い詰められる恐怖というものを体感した。

ガガガ…ガガガ…

「…っ！」

その音がピツタリと止まった。

仁と真珠は上を見上げる。

「きゃあああっ！！！」

「…見一つけた」

そう眩くと、小倉は鉄の棒を思い切り振りかざした。

その辺りにあったガラスに思い切り振りかざした鉄の棒が当たり、
砕けた。

何とか二人は避けたものの少しよけるのが遅かったり、

逃げた場所が手前だったらどちらかが鉄の棒で頭を

かち割られていたところだった。

仁は負傷していたものの必死で振りかざされる鉄の棒から逃げた。

真珠と仁は上から落として弾けたビー玉のようにふた手に分かれ、
命拾いした。

ガシャンツ

「ッ！！」

小倉の攻撃はエスカレートしてくる。
無言の圧力の為、更に不気味さが増し恐怖も
一層増していくばかりだった。

「痛っ！」

そこらへんに飛び散ったガラスの破片が真珠の肌を傷つけた。
しかも、受身した時に思い切り地面にぶつけたのか、
腕も真っ赤にになっていた。

「！！」

「真珠！！！」

真珠の方に鉄の棒を振りかざそうとした小倉に仁は突進し、
奮然として攻撃に転じた。

「！！」

ガツシャーンツ

カランカラン……………

勇作の手に握られていた鉄の棒は向こう側に転がった。
仁は勇作の上に乗っかり身動きをとれなくした。
形成逆転を成したが、腹を思い切り殴られた。

「ゲフッ！！！」

「仁！！！」

「…うう…」

「！！！」

真珠は絶体絶命になった。
勇作は先の鋭利なナイフの先端を二人に向け、無言のまま二人の
方へゆっくりと近づいてきた。

「…ゆ、勇作…っっ」

「……。」

「…何故…こんなこと、するの…？」

「…。」

「一体何の目的で…翡翠を誘拐して…
お父さんを脅迫なんかしたの…？」

「…」

「応えてっ…！」

「くっくっく…っ」

「…!？」

「…俺がお前に近寄ったのもな、
全部お前の父親を追い詰めるためだ。
娘を人質にとられたアイツの顔が見てみたかったから
お前を利用したんだよ。」

「…………っ！」

「だが、アイツはお前を人質に取っても何も抵抗しなくなった。
だからだよ、次は翡翠、お前の妹を人質にとりゃどんな反応するか。
…アイツ、俺の想像通りの反応したな。
もう動揺しまくってさ、おかしいっての。」

「…私をだましてたのねっ…！」

…途中から勇作への不信感は抱いていたもの、
それでもやはり信用していた人からの
裏切りの言葉は真珠の心を切り裂いた。
この男は自分に近寄ってきたのは、父親や妹の苦悶する姿を見て
快感を得るための道具として扱う為だった。
自分が今まで抱いてきた理想や夢は今、この男に全て壊された。

「ははははははははっ！！」

「…っ！」

仁は小倉の笑い声に顔をゆがませた。

本当は飛びかかって殴ってやりたいくらいの憎しみに溢れていたが殴られた衝撃で立つことすらできない。

「…十分楽しませてもらったよ、こんなに楽しかったこともないわ。

ありがとな」

「…っ！」

小倉はゆっくりと二人に歩み寄ると壊れたような

笑みでにじり寄って行った。

二人はもうダメだ、と死を決意した。

互いの体を寄せ合った時だった。

騒がしい音が、工場外から聞こえたのだ。

—プワアアアアアアン…

「…っ！？」

「…米津さん…？」

それは、警察のパトカーのサイレンの音。

その音と同時に小倉は手に持っていたナイフを、足元に落とすと同時に向こう側に蹴り飛ばした。

「—小倉、勇作さんですね？」

「…はい」

「署まで御同行願えますか。」

「ええ…」

「音羽くん！」

「米津さん！」

「真珠ちゃんも！」

「米津さん…」 「よかった…無事で」

小倉は工場に乗り込んできた刑事達に連れられ、光の向こうに消えていった。

そして、真珠と仁は米津に感謝した。

この人が来るのがひと足遅けりゃ自分達はどうなっていたことか…。

「後のことは任せて。君達の場合は家まで送ってくよ」

「はい…痛っ！」

「だ、大丈夫！？どうしたの！？」

「…いえ、大したケガじゃ…」

小倉に切り付けられた右腕と蹴られたみぞおちが酷く痛んだ。

「病院にいかないと！血がでてるじゃないか！」

「あ、はい…。」

「病院の方にも僕が送ってくよ」

「あ、すみません…」

真珠と仁は米津や他の刑事たちにより、無事に保護された。
仁のケガは大したことはなく、腕の切り傷も全治2週間、
みぞおちの怪我は打撲程度で済んだ。仁に怪我を負わせた小倉は
傷害罪とこの町で頻発する事件の重要参考人として警察に連行された。
勿論、仁は死闘を繰り広げて獲得したあの証拠品を警察に提出した。
これが少しでも小倉逮捕に近づくよう川上家族と共に願った。
これで真珠や仁に完全な平和が訪れるように思われたが、まだまだ
問題が残っていた。

—ピッピッピッピッ…

「…翡翠…」

「……………」

—まだ翡翠は目を覚ます傾向がなかった。
真珠と鉄二は翡翠が目を覚ますのを共に待ち続けていた。
このまま翡翠が目を覚まさないとならうしようと、
深く悩んでいた時もあったが小倉逮捕から3日、珍しく真珠と
鉄二の心中が非常に落ち着いていた。
自分達でも何故こんなに冷静でいられるのが疑問で仕方なかった
のだが、それは何かが起こる前兆だったのかもしれない。

「…ん」

「……翡翠っ……！！」

「…お姉ちゃん、お父さん…」

—何と、目覚める様子でなかった翡翠が目覚めたのだ。
幸いなことに姉と父のことも認識できるくらい意識も
はっきりしていた。

「よかった…！！」

「……。」

「翡翠、ごめんね…、ごめんね。お姉ちゃんのせいで翡翠を

こんな目に…！」

「…ううん。お姉ちゃんは悪くないよ」

翡翠は泣きじゃくる真珠の背中をさすった。

無辜な妹をこんな危険な目に合わせてしまったことは姉にとって簡単に消えることのない大きな罪悪感が残った。

しかし、真珠は家族が傍にいてくれることはどれだけ大切なことなのか身をもって知ることができた。

以前の自分では、こんな風に翡翠を抱きしめることはできなかっただろう。

「一…翡翠、本当によかった…」

鉄二も、全く同じことを考えていた。

家族がこうして、毎日元気に生きてくれること。

それ以上、望むものなんて一つもないことに。

「一じゃあね、お父さん。私、明日大学だから」

「ああ、分かった。気をつけてな」

「翡翠、また来るね」

「うん」

一真珠は思う存分翡翠と会話しあうと、面会終了の3時間前に引き上げることにした。

本当は面会時間終了間際まで翡翠といたかったが、明日も大学の講義がある為帰宅することにした。

一方の鉄二は面会時間を超えるまで翡翠といるつもりだった。

「一…お父さん」

「翡翠、ごめんな…」

「ううん。お父さんは悪くないよ」

「本当に、本当に…」

「…………ツ」

「…無事でよかった…」

一真珠が家に帰った後、鉄二と翡翠は熱い抱擁を交わした。

この抱擁は、会えなかった時間全てを取り戻せる位の熱く、深みのある親子の抱擁だった。

小倉へ、もう容赦なんかする気はない。

何があっても奴を許すことは絶対できない。

けど、この出来事がなければ家族のありがたみに一生気付けなかったのかもしれない。

そして、家族の一体感も生まれることはなかったかもしれない。

この事件によかったと思えることは一つもない。

しかし、大切なものの存在には気づくことが出来た。

もし、この事件に礼を述べるならそこ位だ。

「一ねえ、仁」

「…ん?どうした」

「私ね…」

一ちょうどその頃、真珠は仁と二人で家にいた。

仁は、普段なら家に真っ直ぐ帰るところだが今日は遅い為泊めてもらうことになり、真珠は家の縁側に腰掛けながら仁に胸の内を明かしていた。

「…私、こういうことでもなけりゃ翡翠とかお父さんのことを見直す機会なんかなかったかも」

「……」

「勇作の口からあんな事聞いちゃうと、私がやってきたことって本当無駄なことやってきたって思うけど、それでもなかったら私は変われなかった…。」

「…」

「…あんだけ勇作、勇作って言って…。執着して…。周りを振り回して…。あんたを傷つけて…。」

「…」

「私ってなんて馬鹿なんだろう」

「…」

この事件で精神的にひとまわりもふたまわりも大きくなった真珠は今までの自分の行いを自嘲していたが、仁はそうは思わなかった。その言葉を静かに補った。

「一真珠…。君がしてきたことは、無駄でも馬鹿でもない。人は皆そうして成長していくんだよ。」

「…仁…」

「何か得た人に、一度も失敗せずにやってこられた人なんていないんだよ。」

「…それで、いいのかな…」

「ああ。もちろん」

一人は、失敗せずには何も得られない。
それは真珠にとって、胸に残る言葉だった。

一度は、自分の誤った行いに目をそむけようとしたり
現実を見ようとしなかったり、ありもしない妄想や幻想に
逃げ込んだ。

けど、それでは何も始まらない。何も変えられないのだ。
翡翠を取り戻す時、自分が置かれている現状を正しく
見ることができた。

もう、二度と今までのような失敗を繰り返さぬよう一家が足を
踏み出した瞬間だった。

「一ねえ、仁。」

「ん？」

「お腹すかない?なんか、食べる？」

「ああ、そうするよ。…何、食べようか」

＊経歴＊

一小倉勇作。

1988年10月19日生。

32歳。

学生時代両親の仕事の都合で日本中を転々としたが、
どこの学校でも学業優秀だったとのこと。

転校生ながらも周囲からの徳望が高く、人付き合いが上手だった
らしいのだが、担任になった教諭はあまり印象が強い生徒では
ないらしくよく覚えていないという。

「……………」

今、あの男は警察で事情聴取を受けているが
表情を一切変えない。

話口調は一定で、落ち着いている。

慌てている様子すら伺えない。

もはやこの男の隠微な感情を読み取るのは不可能とも言えよう。

「—お前が、やったんだろ？」

「…と、申しますと？」

—非常に頭脳明晰だということは知ってる。

彼は国立の有名大学を卒業していた。

頭脳明晰というだけでなく、運動神経も抜群で
学生時代は部活のキャプテンも務めていたらしい。

かなり運動にも自信がある模様。

とにかく、この男から『欠点』というものがみつからないのだ。

「—どうして、君は…音羽仁と川上真珠の三人で
廃工場になんかいたのかな？」

「彼が僕の彼女を誘惑してるのを知ってつい
我を忘れ衝動的にあんなことをしてしまいました」

「君みたいな…頭もよくて冷静な人でもそんなことで冷静さを
失うんだね…。」

—米津はあの日のことについて問うた。

あの二人にも、平等に話を聞いたが（特に仁の方は）
この男が『大量殺人』を犯しているのを探りに行ったと主張した。
しかしこの男は、男女関係のイザコザだと主張。

大量殺人事件に関与したことなど認めるはずがなかった。

確かに川上真珠は小倉勇作の恋人だ。

あのバーでの調べでも、音羽仁は真珠に無理矢理接触を図ろうと
しているところを幾度となく目撃されていたという。

音羽仁の言う『大量殺人犯』の証拠は、今のところひとつも見つから
ず彼の発言は単に荒唐無責任なものであり

この事件はどんどん小倉の優勢な方へと転んで行った。

「…単なる私人間のトラブルってだけで…

警察に通報されちゃ困りますよ…ホント」

—しかし、音羽仁という青年が警察に届け出たルビーの指輪。

あれは崎本瑠美のものなのかを現在特定中だ。

これが陽であれば優勢になるが、陰であればこちらは劣勢。

全てはこの証拠品にかかっていた。

本当は川上家族・音羽仁よりは劣勢だったがそれを肯定するような私情を一切いれず米津は聴取を続けた。

「一音羽さんて方は、僕に悪意でもあるのでしょうか？
こんな言いがかりつけてきて…。本当は、こっちだって色々言いたいのに。盗人みたいにこそこそ侵入してきて…
そりゃ、こっちだって腹もたちますよ」

「…いや…、もうその事件についてはいい…次は、
もうひとつの事件についてだ。」

「もうひとつの事件…?」

一米津は、この話題を辞め翻然として他の話題に転じた。
それは安藤精肉店の店長が駅のホームから転落したあの事件。
彼を目撃したという人物がいる。
それは音羽仁という健常者ではなく、精神に障害を患い
殊勝な能力をもつものの証言ということが興味深かったのだ。
米津は、こちらの事件の方に力が入っていた。

「これが…証拠品の絵だ」

「…?」

刑事が見せたのは理紗が描いた絵。
一枚の画用紙に仔細に状況が描かれており、
これもかなりこの男を追い詰めるだけの材料になると
刑事も確信していた。

「…君が安藤さんを駅のホームに突き落したのを見たという目撃者がいてね。
目撃者も重要参考人として任意同行した時に
その絵を描いたんだよ」

「……。」

男は言葉に詰まる。

遂に言い逃れはできなくなったと察しそのまま質問を続けた。

「君は、安藤氏が亡くなった日…何してた？」

「…普通にあの日も仕事してました。」

「……………」

—これも所詮、窮余の一策だ。

容疑を認めない犯人のよくある言い逃れなのだ。

安藤精肉店や小倉との仕事関係者に聞けば全部分かること。

調査もあともうひと押し。

米津は後日、二つの店を訪れることにした。

「一はい。」

「あ、あの…〇〇県警の米津と言う者ですが」

「刑事さん…?」

「小早川理紗さんて…、今どこにいるんですか?」

「…ああ、理紗なら一緒にここの寮で暮らしてますよ」

「あの…お時間頂けますか」

「は、はい…」

一米津は更に真相を深めるべく、安藤精肉店の元従業員の元に訪れた。

あの事件以来、老舗だった店は潰れてしまい従業員はバラバラに。現在事件の重要参考人の小早川理紗はかつて同じ店で働いていた店員と住み込みで働いているというのだ。

「一どうぞ」

「あ…頂きます」

一まだ日が浅く、傷も癒えていないというのに我々の捜査の為に協力してくれた。捜査に協力してくれる青年は、顔では笑っているがワイシャツを腕まくりしたところから見えた限りではすっかり痩せかけていた。葬式で見たところがあった青年であり、ほんの数ヶ月前は結構体格の良い印象だったが現在では肉らしいものはそぎ落とされ、少しの筋肉と骨と皮だけで生命を繋ぎとめているようにも見えた。

その青年は、内情を包み隠さず米津に語ってくれた。

何故、自分はここまで痩せてしまったかという理由まで聞き出すことができ、米津は彼らの意外な一面も知ることができた。

小早川理紗は、一見言葉も喋れないだけで社会生活に馴染んでいるように見えるが精神の方に病気がある為、心を開く人と開かない人が存在するらしい。和樹氏は、従業員の中では割と心を開いていた関係だったというのが安藤氏の代わりは決して出来るほどでないという。

そのため、安藤氏が亡き後理紗を引き取ったと言うがなかなか心を開いてくれないス

トレスや、日々の過労でここまで痩せてしまったのだと
言う。

「…店長が事故で死んで…僕ら従業員は職を失って、本当に途方に暮れましたよ…。しかも皆とはバラバラになっちゃうし。」

「……あの、和樹さんとおっしゃいましたね？」

「…はい」

「…もしかしたら、安藤さんの死因は…事故ではない可能性があるんです。」

「え…?どういうことですか…!？」

「…これを見てください」

一米津は安藤氏の死は他殺である可能性を告げた。

クリアファイルに大切に保護した理紗の描いた証拠の絵を見せ、事件のことについて伝えた。

「……というわけなんです」

「…う、嘘でしょ…。一体誰が…。店長は殺されるような人じゃなかった。いつも僕たちのことを一番に考えてくれてて…。恨まれてなんて、絶対ありえない…」

「……。」

一米和樹氏は、その場でヘナヘナと座り込んだ。

安藤氏が殺されるなんて、思いもしなかったのだろう。

人に殺される、という人間の種類からは

多いにかけ離れたような人間であったためかそんなこと想像すらできなかったのだろう。

和樹は、痩せこけた頬の上から飛び出しそうなくらい目を丸くして震えていた。

「……理紗さん呼んでもらっていいですか…？」

そしたらもっと分かりやすいと思うんですが…」

「あ、理紗なら…今、外出してます。」

* 生い立ち *

理紗は最近、ここ毎日のように博信の眠る墓に手を合わせに行っているという。ここから10分も経たないところにあるため、和樹も一緒に行っていないということだ。

米津がどうしても理紗に会いたいと言う希望を汲み、和樹は案内をしてくれると言ってくれた。

「一理紗はね…、17歳からここの精肉店に勤めるようになりました」

「へえ…」

「彼女は本当に店長に懐いてました。…でも亡くなった後、心のよりどころを失って理紗は毎日ふさぎ込むようになってしまいました」

「…。」

「…彼女はやっと、過去のことから抜け出せそうだったのに…」

「過去…?」

一和樹から聞いた小早川理紗の過去。

その壮絶な過去は、驚愕の事実だった。

一小早川理紗、16歳の頃。

支援学校のバスで家に帰宅すると朝に見た家族の姿が最後になった。

『一理紗…』

『…………ツ』

実の父親は右手に持ったナイフで、理紗を壁の方まで追い詰めた。

その横で血を流し絶命する母。

自分もあのように殺されるのだろうか、と壁に背中を合わせ座り込んだ。

もう終わりだ…、絶望の涙を声にならない唸り声が部屋中に響いた…。

『うっ…ううっ…うっ…』

『…………』

『うっうっ…』

『理紗…』

一泣き続ける理紗を見た父親はどこか哀愁めいた顔をした。
そして頭上まで振り上げたナイフを降ろす。

『泣くな…』

『…うっうっ…』

『理紗…、強く生きるんだぞ…』

父は娘にこう言い残すと一

『元気でな』

…自らの頸動脈を切ると、理紗の目の前で絶命した。
その血しぶきは部屋中に飛び散り、凄惨な死を遂げた。

その後、警察の捜査によると父親は一家心中をするつもり
だったらしい。

それをほのめかすような遺書が見つかった。

『最近、こんなことを考えてしまいました。
もし今自分と妻が死んだらどうしよう、と。
うちの家には一人しか娘がいません。けど、娘は重いサヴァン
症候群です。自分たちが先に死ぬのは分かり切っている事実です。
ならば、今自分達は死んだら幸せなのではないでしょうか。
娘が自分達が死んで途方に暮れるくらいなら。
娘にはものすごく申し訳ない話です。
まだまだ未来があるのに。
けど、愛しているからこそ娘が苦しむ姿は見たくない。
だから、私はこんな決断に至りました。
家族みんなで死のう、と。
どうか先立つ不孝をお許してください』

「……………」

「理紗の父親は、重い障害を持った娘が一人になった時のことを
思いつめ過ぎてこのような行動に…」

一小早川理紗は、そんな凄惨な現場を目の当たりにして
しまったせいで更に病状は悪化した。
父親のしたことは結局仇になってしまった。
どんどん孤独になる一方で、一筋の光…。
それが安藤博信氏だった。

これがもし他殺なら…重大な罪だ。犯人は許されない。
人の大切な人を奪ったのだ。

米津は墓に向かい始めた時の顔と比べると険しい顔に
なっていた。
それくらいの気持ちでないと安藤の墓に手など合わせられない。

その時『絶対犯人を捕まえる』、と心に誓った。

「—……………」

理紗は、米津達が向かう墓石に桃色の花を手向けた。

【—安藤家】と彫られた墓。

ここに今、博信の魂は眠っていた。

いつしか彼女は博信の墓の掃除や何か手向けるのが
日課だ。

—『理紗、君は本当に優しい子だね』

—『僕が君をずっと守ってあげるから』

博信は優しくかった。

障害のせいで両親から殺されかけ、その上孤独になってしまった
理紗の唯一の理解者で初恋の相手でもあった……………。

「…グ スグ スッ…」

理紗は思い出を回想したせいか涙が勝手に溢れ出た。

「…」

—そんな時、黒い影が忍び寄る。

理紗は完全に自分の世界に入っていた。

到底気づく様子はない。

黒い影は理紗の背後を完全に奪い、凶器を思い切り振り上げた—。

「—…！？」

「な、何だ…さっきの音」

墓のある丘の階段を米津と歩いていた和樹は、

何かを殴ったような鈍い音が耳に届いた。

「聞こえましたよね…？」

「ええ、なんか鈍い音が…」

米津も和樹ほどではないが、なにか鈍い音が耳に届いていた為
血相を変え、音の方向へ駆けていった。

「—理紗っ！！」

「理紗ちゃん！！」

二人は慌てて階段を駆け上がると、そこには—…

「理紗！？理紗…っ！ああっ…！！」

大きくて重たい石で頭を殴られ、地面には赤い血の跡が
へばりついていました。

「しっかりしろ！理紗ちゃん！！」

米津と和樹は理紗の名前を呼び続けたが、意識は戻らず
救急車に救急搬送された。

＊鑑定結果＊

「一理紗…。」

「……………」

一米津と和樹の通報が速かったため、一命を取り留めた。
しかし傷は深く、まだ意識が戻っていない。
まだ安藤氏の死が、事故なのか他殺なのかはつきりとはしていない
ものの米津はこの出来事が確信となった。

小早川理紗に危害を加える、それは揉み消すための行為では
なかろうかと。

小倉は今、警察で取り調べを受けている。

だから小倉の犯行ではない。

これがもし小倉の計画だとすれば、小倉はもう一人いる。

小倉の右肩的存在になるべき人物がいるはずだ。

米津は理紗のお見舞いを済ませると署に戻って、捜査の続けようと思っていた心中、署の扉を開けた途端後輩刑事に呼び止められる。

「—どうした」

「あの…前、指輪の所有者の特定できました」

「そうか…それは、誰のだったんだ…?」

「…それは…」

「—……………」

「…嘘だろ…」

—米津は鑑定結果を、川上家に知らせに行った。
最近川上家と侵食を共にする音羽仁も居合わせていたため話が早かった。

「なんで…っ、そうなんだよ…」

しかし、その結果は我々が期待していたようなものではなかった。

「俺は知ってる…。アイツが崎本瑠美を殺していたのを…」

一仁が持ってきたもの、それは崎本瑠美の指輪ではなかった。

もし崎本瑠美のものだったとしても奴はそのあと回収したのだろう。ピラニアは金属など食べやしないのを知っているのだから。

結局自分達が奴の後を追っても追っても距離が縮まることはなかった。

突き止めたと思うとそこには存在すらないのだ。

廃工場で小倉に追い詰められたあの出来事も、警察には事件性がないとして私人間のトラブルと片付けられた。納得がいかないのであれば、民事裁判を起こすなりして訴える以外方法はなかった。

「……………」

「…俺が悪いんだ…。真珠を執拗に追い回したりするから…自分のやったことが全て仇となって帰ってきた…」

「…仁、自分を責めないで。私だって悪いよ。事情聴取の時、もっとしっかり喋ってれば…」

一二人は、小倉と廃工場での出来事を事情聴取の時のことを思いだし、共に悔悟した。あの時、もう少し自分が冷静になっていればと今更悩んだ。

冷静であっても結果は変わらなかったかもしれないが。

そもそも自分も真珠も含め、行動にはいくつもの問題点があったと指摘できた。

いくら身の危険を感じたとはいえ、真珠をクローゼットに潜ませたのは甘かった。不法侵入罪で訴えられる隙を作ってしまったし、証拠が見つからないであれば言い掛かりをつけにいて振り返りにあっただけにしか世間は見てくれない。

小倉は、何人も人を殺しているが法律上初犯であるため慰謝料さえ払えば

今回の件に関してはすぐにでも警察から出てくるのが可能なのであった。

一仁は、自分が用の為小倉の元に訪れた時扉の向こうから女の苦しそうな喘ぎ声が聞こえたことを不信に思いそれを問い質しに行く為に事務所に乗り込んだのだと話した。

真珠は、自分の妹は何故誘拐されたのかを知る為に事務所に向かったと話した。両者共に言い分はあったが、問題点はひとつ。それにきちんと証拠はあるのか。

『一…え?』

『そのウエイトレスが、殺されている場面を直接みたのかい?』

『……』

『それに…君たち、小倉氏の事務所に勝手に侵入していたね?』

一仁は言葉に詰まらせた。

自分はそれらしき物音は聞いたが、目で見たわけではない。

そのあとの溜美の行方がどうなったのかも結局最後まで見る勇気はなかった為、分からないままだ。

真珠の話にしろ、小倉がどう事件に絡んでいるのかすら立証するものは今一つ何もなかった。

それに、真珠は小倉の件になると急に話口調が弱くなる。

特別な情が妨げになっているのであろうが、その言い分が自信なさげにとられたのだろう。

悪いことが重なっていったため、こんな最悪の事態になってしまった。でも、それは今更何を言っても取り返しのない話だ。

「一…米津さん。お願いします。僕達の失敗を挽回してください…。小倉を捕まえてください…」

「……音羽くん……だが、それは……」

「アイツを牢から出したら!!また被害者がでます!!
どうにかしてアイツを捕まえてください!!」

仁はよほど悔しかったのであろう。

自分の力で、この悲劇を食い止められると思っていたのに、

自分と真珠が廃工場に追い詰められた件に関しては、

自分の普段の行いが足を引っ張った。

いくら、自分の正義に従ったとはいえ真珠にまわりついたのは

軽拳盲動であった。あれでは、誰が見ても人の彼女を口説こうと

する軽い男にしか見えない。

奴の陥穽にまんまとひっかかった自分のせいで私人間のトラブルと

片付けられてしまった。

普段はわりかし冷静な仁がその事態に感奮していた。

「これ以上…誰かが苦しむのは見たくない…ツ」

「音羽君…その気持ちはものすごく分かる。けど、
我々は…それを立証するものが存在しない限り…動くことも
できないんだ…。」

「……ツ！！」

一米津は胸が痛かった。

こんなに熱意を持って、悪と立ち向かおうとする人を目の前に

何もできないなんて、何とも無力な集団である。

米津と川上親子、仁はそれぞれの無力さに不運を囲い嘆息を漏らした。

「…そうだよ、音羽くん…。彼が悪いのではない…。」

「一番悪いのは小倉だ…。」

「鉄二さん…」

「私だって…結局、同じなんだが…」

鉄二は感情が高ぶる仁の気持ちを収めようと、精一杯

米津をフォローした。

その言葉に少し仁は落ち着いた顔を見せた。

「お、お父さんは!!悪くないよ!!上の人に命令されてただけなんですよ!?!」

真珠は鉄二が自分の非を認めた発言に口をはさんだ。

自分の父が世の中の悪人と同じようなのと同じと思いたくなかったのであろう、それを真っ向から否定した。

「真珠…」

「そうでしょ!?!」

「……。」

「…いや、違うんだ。真珠。父さんは立派な犯罪者だ。」

「…ツ」

「正しいことをしてはいない。…家族を守る為なんてのも、それは単なる口実にしか過ぎない。」

「…。」

—鉄二は、自分のした過去の過ちと向き合えるようになっていた。

さまざまな修羅場を乗り越えてきたからであろうか、

もうこの心に『逃げる』という言葉は鉄二の辞書になかった。

何があっても、自分はこの罪からも逃げないと。

そう決めていた。

「世の中…結局、悪で渦巻いてる。

父さんはその波に飲み込まれてしまったんだ」

「…」

「父さんは弱かった…」

—結局、権力に屈服した者は力の強い者にねじ伏せられる。

これは世の常になのかもしれない。

けどそれに叛逆する力。

それがなければ本当に負けてしまったことになる。

「鉄二さん…」

「…」

「我々はまだ負けてなんかいませんよ」

いざ、本部へ

「……………」

「…………何の用だ、刑事さん」

「あの………」

—今、米津は松名組の本部に一人で乗り込んだ。
警察だが逃げ出したい気分である。けど、そんなわけにいかない。
ここまで来たのだから。

「何の用だい？」

「……あの……」

「さっさと言えや！」

「…っ！」

組員は丸腰の刑事に詰め寄った。
やはり、刑事とはいえ一人は怖かった。
その時、刑事なんていう肩書など何の意味を持たないことを
痛感した。所詮、一人の弱い人間であると。
自分の無力さを肌で感じるばかりだった。

「…やめろ。」

「はい……」

組長の松名が沈めたおかげで組員の盛んな勢いは
静まる。しかし、その殺気立った空気はますます米津の喉元を
詰まらせた。声にもならないような声を必死に絞り出し、
恐る恐る米津に質問を出した。

「…ナイトクラブでこの前……あなたの組員が、
襲撃事件を起こしましたよね」

「……。」

「それで……首謀者だった赤西直也は、獄中で自殺……。
その死に方も普通じゃなかった……」

「『あの人の頼みだから』って…『あの人』、『あの人』って…
まるで催眠でもかけられてるみたいで…」

「…」

「あなたは何か…知りませんか?」

「…何をだい?何を知ってるって?」

「あなたの組員は一体誰に洗脳されていたのか…。

これさえ分かれば…これ以上傷つく人が減るんだ…。どうか、
お願いします…分かっていること少しでもいいから、教えてください
さい…」

「…刑事さんよお。あんた、冗談言ってるのか?」

一松名は目を丸くし、鼻で少し笑った。

まさか自分達にそんな重要な秘密を聞き出してくるとは思いも
よらなかったのだろう。喋らず、ゆっくりと席を立った。

「…聞く相手を間違えてるぜ?」

「!!」

米津は油断した一瞬の隙を奪われ、組員から陰惨な暴行を受けた。
床に頭を叩きつけられ、体は打ち放題。
40代後半の体は悲鳴を上げた。一瞬、死さえも覚悟した。

「…もうその辺にしておけ」

「……………」

米津の身が持たないと判断した松名は、組員たちに
注意を促した。すると、組員は停止ボタンを押されたDVDレコーダー
みたいに暴行を加えるのを辞めた。

「…刑事さん、これはな知っちゃいけねえ領域なんだ。

『あの人』の存在はこれからもずっと秘密だ。」

「…………っ！」

「ただあんたに言えることは…

あんた方警察にでさえも手に負えるような相手じゃない。
何故ならな、証拠が全てのアんたら警察とは対極の
存在にいるからだ。」

—松名は確かにこう言った。

『証拠とは対極の存在』だと。

それは、確かに小倉のことだと。アイツは絶対証拠なんか
残しやしない。いつだって犯跡をくらましてきた。

「これ以上聞きいるようなことしねえなら、返してやるよ。
刑事さん」

「……………！」

—米津はこの時、松名のスーツの内ポケットの瑠璃色に輝く宝石を
見た。確か、この瑠璃色の宝石を見て赤西が怯えていた。
瑠璃…。ラピス・ラズリ…。

この宝石が輝くたびに、我々を嘲る小倉の顔が浮かんだ。

証拠隠滅のためなら、人だって殺す。

やはり、自分の読みは間違えていなかったとそう確信した。

でも、これ以上松名から情報を収集するのは危険だ。

命を奪われる危険性を察し、米津はボロボロになった体で本部を後にした。

「一お大事に」

「……………」

一米津は、組員に散々殴られた後病院で手当てをしてもらった。
自分は痛い目にもあった上、余計な出費までしたついで
ない日にある一本の電話がかかってきた。

「一はい」

『あ…、先輩ですか!?!どこ行ってたんですか!?!』

「あ…ちよつとな…」

『それより、聞いてください!!さっき、多額債務者連続
殺人事件の犯人が名乗りでました!!』

「えっ…!?!」

名乗りでた犯人

「一私が…やりました。」

「……………」

一田沼達也。28歳。

男は数時間前、自分がこの地域界隈で起きていた一連の殺人事件の首謀者だと名乗り出た。

「遺体はどこに隠した？」

「〇〇山中に…骨を隠しました」

この男の家の家宅捜索で…、血液の付着した包丁が発見された。

どうやらこの男は遺体の皮膚をはいだ後証拠隠滅の為に山中に骨だけ埋めたというのだ。

「場所はどの辺りだ？」

「……………」

「？」

「……………なさいツツ」

「?何を言ってる？」

「ごめんなさいツツ…」

何故か、男は誰かに謝罪していた。

目は涙ぐみ、歯を食いしばり深く反省しているかのようだった。

けど、骨を隠した場所を具体的には言わずその日の事情聴取では何も絞り出すことはできずに終わった。

「一え…?犯人が捕まった…?」

「ええ…」

一真っ先にあの川上家族と音羽仁に伝えた。

けど、彼らの答えはこうだった。

「…そんなの…納得いくわけじゃないじゃないですか!」

「…」

「アイツのことです、また誰かを洗脳して思い通りに動かそうとしてるんだ…。僕らも一緒に連れて行ってください!」

「…私も音羽君の意見には賛成です。米津さん、どうか私たちを山中へ…」

一捜査一課が〇〇山中で捜索を始めた3日後だった。

本来なら関係者以外を山中へ連れて行くのはタブーであったが、

三人の強い意志を汲み、米津は現場へ連れて行くことにした。

特に仁は、自分の失態で大チャンスを逃してしまったという悔しい思いをしている。それが晴らせるかどうかは分からないが、出来る限りのことはしてみようと思った。

「一…………足場が悪いので気をつけてください」

「こ、こけそう…」

やはり、夜の山道は足場が悪い。

集中しなければ完全に足をとられる。

鉄二、仁、真珠、米津は遺体を埋めたと思われる場所まで向かった。

「一田沼はこの山中に埋めたと言ってます…」

田沼達也が埋めたと証言する場所に、4人は訪れた。何の変哲もないように見えるが、もしここに人骨が埋まっている想像をするだけで背筋が寒くなった。

4人は、田沼の示した辺り一帯を回りながら何か証拠をつかめないものかと探し回っていたら、あるものが真珠の目に飛び込んできた。

「あ…!」

「どうした真珠」

「お父さん…これ…」

真珠は、白くて細長いものを鉄二に見せた。

暗澹とした空間のせいで、よく見えなかったが米津が持っていた懐中電灯で手元を照らした。

それは、一度鉄二も真珠も見ただことのある例の物だった。

(一ほら、饞別だよ)

(久村くんの大事なお骨を分け合って、これからも仲良くしような。)

(…………ツ)

(なんだよ、ビビってんのか?)

(……)

(お前が殺した奴の骨なんかな、ドツサリあるんだよ。吊ってやるつもりでさ、ホラ。形見として残しておけるようにピアスに加工したから。な?田沼)

(あ…ハイ)

(一…うわあ～…、血生臭え～…。出来具合の方はどうだ?後どれくらいで終りそうだ?)

(後、足の肉を削ぐだけです!!ん～…、15分くらいで終りそうかな)

(…そうか。そりゃ、御苦労。全部削いだら呼べ。後の始末は俺がやっておくから)

(はいッ!!)

ザーツ、ザーツ…

一…深夜の浴槽。この悪魔のような男と、この男に慕うチンピラ風の男の会話は血しぶきが飛び交う凄惨な中でも平然と行われた。

まるで日常にありふれた作業を、行うように。

「勇作の…ピアスだ…。」

「!？」

一男に伝令された人物は、それに逆らうこともできずただ言われるがままに人を殺し、闇の世界へほおむられた。

まともな弔いもされず、浮かばれない魂は誰にも知られることなく姿を消していったのだ。

「な、何で…ここに…？」

「真珠…分かるのか…？それが…」

「勇作は…私といるとき、母親の形見だとか言ってつけてた。どうして、こんなところに…」

「…やった…これで、小倉のアリバイが全部立証される…！」

奴は、有罪だ…!後、真珠が警察でそのことを話すだけだ!!」

「…。」

一その証拠品を見た仁は、小倉の足がついたと思われた。

これで今まで小倉の毒牙にかかり不運な死を遂げた人々は浮かばれると思えた。しかし、米津の反応は渋かった。

「でしょ!?米津さん」

「…。」

仁が勢いよく後を振り返った先に待っていたのは、米津の何とも神妙そうな顔だった。

「…米津さん？」

「いや…、あいつは…明日釈放される予定だ」

「え？」

「とうとう証拠も見つからず、事件の犯人まで名乗り出た。

奴は実際、この事件で手を下したわけでない。

…そして、この証拠品が直接的に関係生を立証するのは難しい。

そもそもその骨が男なのか、女なのかすら、分からないからな…」

「…………ッ!」

—それを聞いた瞬間、仁の笑顔は崩れた。

静寂に包まれた森の中に眠る土の上に崩れ落ちると、爪をたてかきむしり口惜しさを現した。

「…くそっ…!どうしてだっ…!」

「仁…」

真珠は、やっこの事件解決に一筋の光が差し込んだと思われたのにも関わらずまた希望は断ち切れようとしていた。

「奴は、俺達を嘲笑っているのか…っ!」

「…っ」

「…。」

「…。」

この絶望的な事態に誰も、仁にかける言葉が思いつかなかった…。

(一で、小倉さん。コイツはどう始末するンすか?)

(コイツは...、仲間でもなんでもなかったからなあ〜。俺ソちのピラニアの餌にしちゃおっか...。)

一俺は小倉さんが、そのあと切り刻んだ遺体をどうしていたのかは知らない。
焼いたのだろうか、ピラニアの餌になったのだろうか。
ここから先は、赤西しか知らないことだ...

「.....ツッ!」

一でもあの時だけは見てた.....。

赤西が、小倉さんにあの例の宝石...ラピスラズリをスーツにいれられる瞬間を...

でも、それを見てないふりをした...

一今日、連続殺人事件の首謀者と名乗り出た田沼は独房で一人思いだしていた。
小倉が自分達を恐怖で支配し、征服されていたことを...

逆らえば、こうなると.....。

(一あがっ...がはっ...)

(.....。)

(.....ツ!!!)

(...お前たちもな、俺に逆らうとこういう目に合うんだよ)

見せしめの為に何人も仲間を目の前で殺された。

忠実に命令に働いたもの、意思のないものだけは何とか命を奪われることだけは
勘弁してくれた。

俺と赤西、黒沼、この三人だった。

組長はいつも、小倉さんが俺達の仲間を殺すことを「振いにかける」と表現し、
小倉さんのすることに何の否定もしなかった。

「.....ツ」

俺は、あの宝石の感触を感じたくない...

それが俺達の終りだからだ。

だから、俺は入れられる前に…。

と、自分のスーツの中を探った。

「まさか…な」

ホッと安堵したのもつかの間、あの感触を感じた。

「えッ…？」

手に感じる冷たい感触。

目に飛び込んでくる青い石…。

「やめろ…、やめろ…っ、やめてくれ…っ!」

目の裏には、小倉の顔が浮かんできた。

自分に催眠をかけてくる。薬を打たれ、それに体が耐え切れず死んでいった者達の中で唯一生き残った者は、変性意識状態の中何度も自分の死ぬときのシュミレーションをさせられた。

【お前はこの石を見ると自ら首を絞めて死ぬ】

「ああっ…!ああ…っ!」

【自分のワイシャツを脱いで…、それを首かける】

「……………ッ!」

田沼は、独りでに自分の上着を脱いでそれを首かけていた。

心は必死に拒む。

しかし体は、言うことを聞かない。

「ああっ…!」

ギイツ、ギイツ、ギイツ……

「があああああああああああああああ…!!!!」

…声にもならぬ呻き声が、独房内だけを静かに包んだ…。

最悪

—我々は、この戦いから逃げることなく立ち向かえば
いつかは勝利の女神は微笑んでくれると信じていた。
しかし現実はそのようではなく、我々が妄信してきたものは全て
嘘だったと証明された。

「—小倉…。」

「…鉄二さんじゃないですか、お久しぶりです」

「…お前、明日釈放になるんだってな」

「ああ、知ってましたか。おかげさまで」

—鉄二は小倉が正式に釈放になる2日前、面会に行った。
やはり、奴は平然とした顔をしていた。
それもそうだろう、旧悪が露見されることもなくここでいた
時も全てが思い通りだったのだから。

「俺は、お前にいつかばらされるんじゃないかという
恐怖に怯えながら生きてきた…。けど、今の俺は違う。
罪とちゃんと向き合って更生するよ」

「へえ…、素晴らしいじゃないですか。それは、僕も
更生できることを願ってますよ」

「時間だ」

看守の指令により、鉄二と小倉の奇妙なやりとりは一旦
幕を閉じた。

我々は結果的に小倉に負けた。

しかし鉄二達は希望を完全に捨てたわけでもなかった。

けど、必ずその先にできることがある。

そう信じていた。

—もちろん、このことは翡翠に伝えた。

恐怖や不安に再び襲われるかもしれないというのも考えられたが、嘘をつくわけにはいけなかったので意を決して伝えた。

「あの人が…釈放？」

「ああ…、ごめんな。翡翠。アイツを有罪にできなくて…」

「…嘘…」

翡翠は、あの事件があまりにショックであの時の出来事が記憶から抜け落ちてしまったため、証言ができなかった。思い出そうとしても頭が疼痛し翡翠はいつも途中で根をあげていた。それくらい精神的に傷ついた出来事のことをまた蒸し返すことで、鉄二が予想した通りの反応が帰ってきた。

「またっ…アイツが襲ってきたら…」

「大丈夫。」

「……。」

「絶対、父さんが翡翠を守る。」

「お父さん…。」

不安で涙する翡翠の肩をソッと抱き寄せ、慰めた。

絶対翡翠を傷つけるようなことは二度と起きぬよう自分が全力で守ると誓った。

—失ったものも確かにあった。

十数年間隠し通してきた秘密や、翡翠の大切な一部記憶やその他もたくさん。

けど、もうそれ以上失うものなんてない。

一小倉釈放まであと一日。

この事件の重要参考人の小倉は、ニュースでこのように報じられた。

『一続いてのニュースです。

多額債務者連続殺人事件の重要参考人の

小倉勇作さん（32）が証拠不十分として明日釈放される予定です』

それは、小さな平凡なラーメン屋のカウンターにも報じられ、

何も知らない客たちは自分らの勝手な憶測で事件について

ああだこうだと語っていた。

「…よかったなあ～…、そんでこれ犯人捕まったんだろ？」

「解決してよかったじゃないか」

皆、事件解決を祝福していたが

店内で一人険しい面持ちをしている人物がいた。

一小倉勇作…。

アイツのせいで…。

それは汚い身なりの痩せこけた中年の男だった。

男は客たちの会話に入るわけでもなく、ただ言いたい放題ものを

言う客を睨みつけるだけだった。

彼は早々とラーメンを食べ終わると、とある場所に向かう。

「……………」

男の向かった場所は家ではなく、河川敷だった。

不良中学生のたまり場でもあり、襲撃の対象になったことは一度や二度のことではない。汚れた服の下に隠れた肌には無数の痣や傷はいまだに残っている。

男は自分の手に握りしめた僅かな小銭を手に、ある場所へ向かった。

「—900円です」

「……………」

「ちょうどお預かりします」

それは深夜のコンビニ。

男は少しの飲食物を買うと、路上でそれらを食した。

「……………」

帰る場所がなく、河川敷周辺一体を流浪する男は自動販売機の下に落ちた金や、スリなど犯罪まがいなことをしながら何とか命を繋ぎとめていた。もちろん、こんな姿だと皆の目にとまった。

男は食べ終わった後、もうひとつ食べ物以外に買ったものを取り出そうとした時だった。レジ袋につっこんだ手を止めた。

「—おい、そこで何してる」

「…」

深夜、路上で座り込んでいた男に警官が職務質問をしてきた。暗澹とした深夜の路上では、互いの姿を確認するのに精いっぱいだったが、黒く縁取られる人のような物体から発せられる音だけを頼りに会話を進めた。

「身分証明するようなものは、持っていないのか」

「あ、…」

男は有り金少ない財布から取り出した免許証からは、「嵯峨雅男」と記されていた。

「…ふうん、こんなところでいないでサッサと帰れ」

「…」

男は警官に職務質問されるだけで免れ、いつもの河川敷に向かった。河川敷に向かう途中の道で何度も立ち止まりレジ袋の中の購入した品を見つめた。そして、男はその都度こう呟いた。

「アイツ…殺してやる」

導いた答え

一翌日。

「……………」

今日も真珠と鉄二は無言の朝食を取った。

やはり小倉釈放の日ということで笑顔がない。

そんな土曜日の静謐な朝ご飯の後、決まった時間に仁はやってきた。

「一…今日、小倉釈放の日ですね。」

「…ああ。」

「どうなさる…おつもりですか?」

「…どうなさるって…」

「このまま放っておくんですか?」

「…」

一鉄二に一時、沈黙が走る。考えがまとまっておらず、

言葉に詰まったのであろうか。

鉄二に続きいよいよ誰も喋らなくなる。

朝にも関わらず夜のような静寂が一家を包んだ。

しかし、鉄二は黙想にふけていただけなのか次に発した言葉にはまとまりのある意見だった。

「…アイツはどこまでもうまく逃げるんだろうな。

罪からも…法からも…。

俺はアイツにちょっと、会いに行くよ」

「え…それなら、僕らも行きます」

「…君はいい。ここにいなさい」

「え…どうしてですか」

「…そんなのどうでもいい。ここにいるんだ」

「いいから。君は真珠と待ってなさい」

「いや、僕らも行きま…」

と、言いかけた時だった。

鉄二は鞆から、恐るべきものを取り出した。

「!？」

「来るんじゃない…っ」

「お父さん…!」

鉄二は、ついてこようとする真珠と仁を包丁で威嚇した。

それで威嚇しながら、横にかけてあった黒いコートを被った。

「…行ってくるッ」

「……っ!」

鉄二が包丁を持って、家に出て行った直後、

仁は血相を変えて真珠に呼びかけた。

「やばいっ！僕達も追おうっ！」

仁は真珠を連れ、鉄二の跡を追った。

このまま放っておくと、鉄二は小倉を殺しかねない。

それだけは絶対阻止しなくてはならない。

「一鉄二さん待っ…っ！」

仁はガレージまでたどり着いたが、

鉄二はエンジン全開で車庫から車を出した後だった。

「……………」

殺してやる……………。

鉄二が鞆に入れたもの、それは携帯とナイフ、
そして遺書だった。

刺し違えてもいい……。

もう、自分が…やるしかないんだ。

鉄二はマフラーを吹かすと目的地へ向った。

「ふう〜〜〜…」

—小倉勇作は釈放になるなり、持参していた煙草の先端にライターをつけた。

息を漏らすと煙が空へ舞い上がった。

「やっぱ、シャバの空気は最高だな」

などと誰もがいう決め台詞を言うと、呑気そうに歩き始めた。

「ふああああ…」

大きな欠伸も出る。罪を犯した人間の態度とは思えない姿だった。

「…………ツ！」

鉄二は車から小倉の後ろ姿を眺めていた。

気づかれてはいない。それに、物凄く今は無防備だ。

一撃でしとめれば、奴の首をとることができる。

強い確信と決意を胸に鉄二は車から降りた。

少しずつ…少しずつ…、後から距離を縮めて行く。

ばれぬよう、ばれぬよう…。

「—はあっ…はあっ…はあっ…」

「…っ！」

真珠と仁は何とか鉄二の場所を突き止めた。

鉄二は歩きから走りに変え、最後のラストスパートへ近づく。

「…っ！」

後、数cm、後、数mm…

「あ、ああ……っつ」

「鉄二さんっ！！」

「ああっ！！」

「…！！」

一足遅かった。

小倉は倒れ込んだのを見て、鉄二がてっきり刺したのと思われた。

…何もついていない。

どうやら鉄二は小倉を刺してはいなかったようだ。

けれど、さっき小倉は倒れた。

一体何が…？

小倉の元へ三人は駆け寄った。

すると小倉は、もう息絶え絶えで三人がいることさえも気づいていないようだ。

あの一撃で致命傷を負っていた。

「—…だ、だ、誰だ…？」

「……覚えてないか。嵯峨雅男のことなんて。」

「お、お前…死んだんじゃ…」

「俺はお前を殺す為に潜伏してたんだよ！！

自ら死んだことにしてな！！」

「あ…ああ…」

「俺はお前のせいで家族も家も財産も…

工場も全部失ったんだ！！！」

「…っ…！！」

—それは昨夜、ラーメン屋で小倉釈放のテレビを見ていた人物だった。小倉に人生を狂わされた一人中小企業の社長・嵯峨雅男は河川敷で逼塞しこの上ない屈辱を味わっていた。

「俺の苦しみを今全部味わえっ！！」

「……………!!!」

嵯峨が突き立てた一撃には、今までの憎悪のすべてがこの包丁の先端にこめられていた。

「ググあああああっ…！！！」

「…！！」

「きゃああっ！！」

「真珠、見るな！！」

仁は小倉がめった刺しにされる場面を見せぬよう仁は慌てて抱き寄せた。

「いやああああ！！！」

周囲の人間も血まみれの小倉と返り血を浴びた嗟峨を見て、ようやく叫んだ。

「救急車ー！救急車！！」

「お前を殺人容疑で現行犯逮捕する！！」

近くにいた警官に嗟峨は取り押さえられた。

嗟峨は何の抵抗もなく連行されていった…。

鉄二と仁はその場面に啞然としていたが、
それが一旦終息した後鉄二は二人にこう言った。

「真珠、仁くん…。」

「お父さん…」

「鉄二さん…」

「……真珠。」

「はい」

「お前は翡翠のことを守ってくれ…。」

「お父さんはずっと逃げてた…自分の罪からも…現実からも」

「仁君」

「は、はい」

「…君に真珠と翡翠を守ってほしい…。」

「…は、はい」

「父さんは…私は…警察で罪を償うことにするよ……」

「……」

鉄二は、包丁の入った鞆を仁に託すと
再び向きを変え、どよめく群衆の中へと消えて
行った…。